石巻市

文化財だより

第30号

もくじ

新指定の文化財 ……1
平成11年度新金沼遺跡発掘調査報告 ……2
新金沼遺跡現地説明会 ……4
常夜燈崩壊防止工事 ……5
石碑転倒防止工事 ……5
平成11年度文化財めぐり ……6
文化財標柱製作設置 ……7
文化財防火デー ……8
工事の際の文化財取扱い ……8
指定文化財一覧 ……8
石巻城跡の発掘調査 ……9

石巻市教育委員会

平成十一年度 新指定の文化財

石巻市教育委員会では、平成十二年三月一日付で、祝田浜常夜燈と、江島サッパの二点を市の文化財に指定しました。

今回の指定で市指定文化財は合計二十二件になり、県指定文化財、国指定文化財を含めると二十九件になります。

今回指定した文化財について概要を紹介します。

金華山道標　「常夜燈」

江戸時代になり、庶民の生活が豊かになってくると「お伊勢参り」などに代表されるように神社にお参りするという民間信仰が人々の中に広まり、「講」を組織して人々がお金を貯め、代表者が神社にお参りしてくるということが行われるようになりました。

金華山信仰もそうしたものの一つで、牡鹿町の金華山にお参りに行くものです。

お参りに行く人々が通った道は「金華山道」といわれ、仙台の国分町がその出発点であったといわれています。

この道は、大街道から石巻市内に入り、鰐山を越え、現在の石巻小学校の北側付近を通り、住吉で北上川を渡り、湊、渡波地区を通り、牡鹿半島の各地区を通って金華山にいたるもので、この道筋は現在、一部を除いて国道や県道などになって残っています。

このような街道には道しるべとして、道標や一里塚などが設けられていました。

石巻市内では現在、今年度市の文化財に指定した祝田浜常夜燈のほかに大街道の交差点、永巌寺前、湊根上松に道標がありますが、昔はもっと多くの道標があったものと考えられます。

祝田浜常夜燈は、江戸時代、文化十年（一八一三）に塩田の釜主ら五人によって建てられたもので、金華山道の祝田浜側の渡船場だった場所にあります。

この常夜燈は、井内石で制作されたもので、石垣を築き、その上に明かりをともすようになっています。正面・東側の石垣には「永代燈」の文字と寄進者の名前などが刻まれ、北面の石垣には、祝田浜から金華山までの陸路と海路の里程と、途中の各地区の名前が刻まれており、金華山までの当時の道筋を推定できるものです。

この常夜燈は、建てられた場所からほとんど動かされておらず、かつ、当時のようすをよく示しているものと考えられ、江戸時代の金華山信仰や、金華山道、街道のようすなどについて考える上で貴重なものであるため、市の文化財に指定し保護をはかるものです。

木造和船「江ノ島サッパ」　付属道具九点付き

石巻地方沿岸部は、昭和三十年代頃から軽くて強度のある強化プラスチック船（FRP船）が普及し始めたことや、木造船を制作できる人も高齢化が進んでいることから、木造船自体作られなくなってきています。

このため、石巻文化センターは、伝統的な和船の建造技術を後世に残すため祝田の阿部忠雄氏に、木造和船新造を依頼しました。平成三年七月に造船を開始し、同年九月に船下ろしました。

この船は、アワビ取りに使われる船であり、船型がずんどうで、深さがあり舳先（へさき）が立っているなどの特徴がある船で、磯浜の風波に対応した構造を持ったものであり、木造和船の構造や失われつつある木造和船建造技術を知る上で大変貴重なものです。

この船は現在、石巻文化センターに櫓や櫂などの付属道具をあわせ、展示されており、これらを一括して市に文化財に指定し、保護をはかるものです。

これらの文化財は、石巻市のみならず、国民共有の財産として、また、昔を知るための貴重な資料として、とても大切なものですので、永く保存していきたいと思います。

木造和船　江ノ島サッパ

祝田浜　常夜燈

平成十一年度
新金沼遺跡発掘調査報告

Ⅰ　調査実施要綱

【遺跡所在地】
石巻市蛇田字新金沼

【調査対象面積】
約六六〇〇㎡

【調査期間】
平成十一年五月十七日から
平成十二年三月三十一日

【整理作業期間】
平成十一年四月十二日から
平成十二年三月三十一日

【調査主体】
石巻市教育委員会

【調査担当者】
石巻市教育委員会
社会教育課文化係主査　芳賀　英実
文化係主事　古沢亜希子
文化係嘱託　今野　勝成

【調査参加者】
大橋　隆雄　岡　千恵　加藤寿美子
黒田　茂宣　穀田　吉夫　西條　芳子
斉藤　貴志　斉藤　初弥　斉藤よし子
佐々木規悌　菅原　千恵　長谷川信雄
千葉　典子　三浦　実
社会貢献活動体験学習（教員）
青山　正興　阿部　昭博　小山　弘子
佐々木朗則　田口　京子　戸沢　拓也
八重樫紀子　山内　聡

【整理作業参加者】
葛西　ふみ　末永　千秋　三浦　美穂
茂木希巳江　八木　佳奈　木村　瞳

Ⅱ　調査の概要

1　はじめに

新金沼遺跡は、付近の畑などの耕地を分布調査した際に、土器片（土師器・須恵器）や鉄滓などが発見されており、古墳時代から平安時代にかけての集落や生産遺構（製鉄施設等）があったと考えられていた遺跡です。

新金沼遺跡の発掘は、平成三年度から平成五年度まで高規格道路へのアクセス道路建設（県道）に伴う埋蔵文化財調査を実施し、平成七年度から建設省東北地方建設局の「三陸縦貫自動車道」建設工事に伴う発掘調査を実施してきました。

発掘調査の結果としては、平成三年度から五年度までの調査では、遺構・遺物などは見つかりませんでしたが、平成七年度から平成十一年度の調査では、古墳時代前期（四世紀頃）の住居跡や溝跡が見つかっています。

2　新金沼遺跡の位置と環境

新金沼遺跡は、石巻市の中心部から約四㎞西にあり、河南町の須江丘陵東にのびる標高約一・五～一・七ｍの微高地上に形成された遺跡です。

遺跡範囲の現況は水田・畑地・宅地等ですが、発掘調査等の結果から新金沼遺跡周辺は、海退による浜堤と河川による自然堤防が交差しており、湿地と小高い平坦地とが入り組んでいたと思われるところで、そのようなところに古代の人々が生活を営んでいたと考えられます。

新金沼遺跡の北西約二㎞のところには古墳時代前期の方形周溝墓などが見つかった新山崎遺跡があり、さらに北へ行くと河南町須江丘陵の遺跡群があります。

また、同じ浜堤上の西側には弥生時代から奈良・平安時代の遺構が見つかっている矢本町の小松遺跡や赤井遺跡があります。

一方、新金沼遺跡の東側には古墳時代前期から奈良・平安時代の遺構が見つかっている田道町遺跡や清水尻遺跡などがあります。さらに、北上川の東側にある渡波にある鹿松貝塚の発掘調査でも、古墳時代前期の住居跡が二軒見つかっています。

3　発見された遺構と遺物

新金沼遺跡からは、分布調査等で古墳時代前期・後期の土師器片や奈良・平安時代の須恵器片、時代不明の鉄滓などが見つかっていますが、これまでの発掘調査で弥生時代の遺物と古墳時代前期の住居跡三十五軒、土壙（人為的に掘られた穴）六基や奈良・平安時代の遺物、溝跡中世陶器などが見つかっています。

平成十一年度の発掘調査でも、弥生時代の土器や古墳時代前期の住居跡が三軒、土壙が数基と古墳時代前期の土師器が多数見つかりました。

【住居跡】
これまで新金沼遺跡からは三十五軒の住居跡が見つかっていましたが、今年度の調査でも三軒の住居跡が見つかり、合計して三十八軒になりました。

住居の平面は方形を呈しており、一辺が約三ｍほどの小型のものと一辺が約四～五ｍほどのものや六ｍ前後の中型のもの、一辺が約七ｍのやや大きなものに大きく分類され、住居跡の多くは、四～五ｍの中型のものです。

また、炭化材が出土した住居跡や灰白色火山灰が検出された住居跡があります。

炭化材は約六割の住居跡から見つかり、住居跡の一軒からは屋根を葺いたカヤや梁、桁材、それらを結びつけたと思われる植物のツルなどが炭化して残っていました。

灰白色火山灰は、半数の住居に見られました。この火山灰を分析したところ、十世紀前半に降下した十和田火山のものとわかり古墳時代前期の住居が廃絶したあと住居は埋まりきらずに窪んだままだったと考えられます。このことは、住居の重複が少ないことからもうかがえます。

遺構の範囲としては、調査地点の全域から検出されていますが、地形を見ると北東部と南部に傾斜し、おちこんでいることから遺跡はここから北東部にある新山崎遺跡の方に向かって延びていくと考えられます。

【遺物】
これまでの調査では、弥生時代の土器や土製紡錘車、古墳時代前期の土師器鉢、高坏、器台、甕、台付甕、壺、甑、管玉、

ガラス玉、石鏃、石製品等が見つかったほか北海道系の続縄文土器（後北C2―D）一個体や東海系の高坏、二重口縁壺の口縁部や体部に縄目等のついたものが見られました。

弥生時代の土器片や多数の古墳時代前期の土器が見つかっていますので、発掘調査と同時に遺物の水洗いや土器の復元作業などの整理作業も行いました。また、出土土器の中には宮城県内ではあまり見かけない土器があることから、それらがどこから来たのか解明するために現地調査を行いました。

今年度は、昨年度出土した注ぎ口と思われる穴が二つある土器の類例を調べるため茨城県内の調査を行いました。その結果、三つの土器を管でつないだような「三連結土器」といわれるものに似ていることがわかりました

新金沼遺跡から出土している土器の中には関東地方で出土している東海系土器が含まれているので、三連結土器の制作方法が茨城県から石巻に伝わっている可能性も考えられます。

また、一方では、新潟県豊栄市の葛塚遺跡でも、こちらは注ぎ口が二つある土器であると考えられているようですが、同じような土器が出土しており、同時に続縄文土器もみつかるなど、新金沼遺跡と似た環境であることから比較検討が必要です。

【まとめ】

新金沼遺跡は、標高一・五～一・七mの浜堤に立地しており、弥生時代から平安時代の土器が見つかっていますが、住居跡などの遺構はほとんど古墳時代前期のものです。

住居跡の多くは炭化材が見られることから焼失住居と考えられます。また、半数の住居の埋土に灰白色火山灰がみられます。

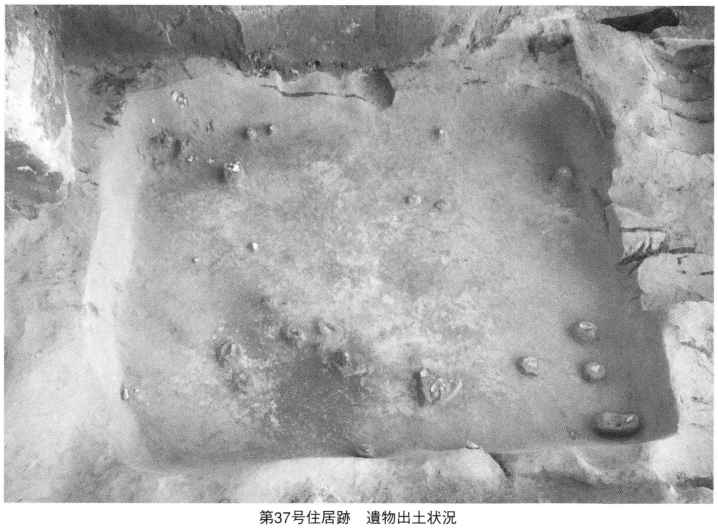
古墳時代前期（塩竈式）の土師器等多くの遺物が出土していますが、遺物の中には北海道系の続縄文土器や東海系の土器が見られ、それらの地域との交流を考える上で貴重な資料が得られました。

遺跡の立地（浜堤上に位置し、北上川河口に近い）や、北海道系土器・東海系土器が出土していることから、文化の交流地点と考えられ、特に東海系土器は関東地方を経由して海路で石巻にきた可能性が考えられ、新金沼遺跡は港的性格を呈していたと思われます。

住居跡の分布や地形を見ると、調査範囲は遺跡の東端と考えられ、方形周溝墓が検出された新山崎遺跡がある北西部に向かって遺跡が延びるものと思われます。

また、土器の胎土分析や、遺跡から見つかった石鏃の素材である黒曜石の分析を行った結果、黒曜石は宮城県北の宮崎町湯ノ倉のものである可能性がでてきました。

今後は、発掘調査は終了しましたが調査で得られた資料の整理を行っていく予定です。



第37号住居跡　遺物出土状況

第37号住居跡　完堀状況

平成十一年度 新金沼遺跡現地説明会

平成七年度から石巻市教育委員会が発掘調査を行ってきました新金沼遺跡で、平成十二年二月五日に現地説明会を行いました。

冬の寒い時期であるにもかかわらず二百人近くの人が説明会に参加し、皆、興味深げに発掘された土器や竪穴住居跡を見学したり、担当者に質問をしたりしていました。

今回の現地説明会は、新金沼遺跡の発掘調査の最終年度にあたるため、今までの発掘調査の成果を市民の皆さんに知ってもらうことと、注口が二つついたような形をした珍しい土器や集落跡ではほとんど見つかることがないといわれているガラス玉、管玉が見つかったことから行ったものです。

新金沼遺跡は、古墳時代前期の集落遺跡で、これまでに竪穴住居跡が四十軒近く見つかっており、石巻地方における古墳時代の初め頃の大きな集落のひとつである可能性が考えられています。

竪穴住居跡からは多くの土器が床に置いたままと考えられる状態で見つかるとともに、屋根材などが炭化した状態で見つかり、新金沼遺跡に住んだ人々が当時どのような土器を使っていたかということや、竪穴住居の生活空間の使い方という事を知る上で貴重な成果となっています。

また、特筆すべき成果として、関東地方やそれより西の文化の影響が考えられる縄文を施した土器や、このころの北海道で使われた土器である「続縄文土器」などが出土し、これまで、石巻地方ではほとんど考えられなかった古墳時代はじめの関東地方や、北海道の人々とのものや人の交流について考える上で、非常に貴重な成果があったことがあげられます。

一方、古墳や、豪族の屋敷の跡から出土する例ありますが、住居跡から出土することは非常に珍しいガラス玉や管玉といった装飾品も見つかり、豪族か祭祀を行った人物がここにいた可能性が高くなり、新金沼遺跡での人々の生活などの様子が次第に明らかになってきました。

注口土器と思われるものは、お椀形をした土器の下の方に注ぎ口のような穴を二つ持つものです。このようなものは、東北地方の古墳時代前期の土師器といわれる土器のなかには見られず、また、北海道の土器にも同じようなものがほとんど認められないきわめて珍しいものです。

この土器については、ごく少数ですが茨城県や東海地方で見つかっているカメや鉢などを3つ、三角形を作るようにつなげたような「三連結土器」といわれる土器によく似ています。このようなものは祭祀の目的で作られたものであると考えられ、また、全国的にも出土例が多くなく、非常に特徴のあるものです。

石巻市内の遺跡からこのようなものがでてくるということは、古墳時代前期に関東地方や、そのほかの文化が、途中で他の地方の文化の影響を受けることがなく石巻まで伝わってきていることが予想されるものです。

新金沼遺跡は、平成十一年度で発掘調査が終了し、その後は埋めもどされ、高規格道が建設されますが、ここで出土した土器は石巻の古墳時代を解明する上で非常に貴重なものといえると思います。

平成十一年度 文化財補修工事

石巻市教育委員会では、平成十一年度、合計二件の文化財の補修工事を行いました。これは、転倒や崩壊などによって文化財が失われたり、損傷したりすることを防ぐことや、それによって人や建物に被害が及ばないようにするため行われるものです。

工事の際には、できるだけ現代の工法を使わず、現状を変えないように注意した上で工事を行いました。

梨木畑石碑転倒防止工事

石巻市渡波字梨木畑地区に、久米幸太郎にあだを討たれた滝沢休右衛門という人物の胴がら塚という石碑があります。

久米幸太郎は、幕末の新発田藩（現在の新潟県）の藩士で、四十一年間もの長い時間をかけて父親のあだを討った人物として知られているとともに、当時現場に居合わせた人々からの聞き書きが残っており、仇討ちが実際にはどのように行われたのかを知ることができる貴重なものとなっています。

仇討ちが行われるきっかけとなった出来事は、諸説ありますが、久米幸太郎の父弥五兵衛は、藩士の家で行われた囲碁大会で、滝沢休右衛門と言い争いとなり、その結果、休右衛門に斬り殺され、休右衛門はそのまま、行方をくらましました。

幸太郎は、父のかたきを討つ決意をし全国を探し歩くうち、石巻に休右衛門がいることを知り、渡波の五十鈴神社周辺で僧の姿をしていた休右衛門を討ったのです。

その後、地元の人が現場に残された休右衛門の胴体を埋めて供養したのが「胴がら塚」といわれていますが、石碑が永い年月のうちに傾きはじめており、大雨などで地盤がゆるんだ際、転倒し、民家に被害がでる危険性があったので、石碑の転倒防止の工事を行いました。

工事は、石碑をまっすぐに建て直し、転倒しないように周りを補強するものでした。この工事により、久米幸太郎の仇討ちを伝えるこの石碑が永く後世まで伝えられるようにしたいものです。

祝田浜常夜燈崩壊防止工事

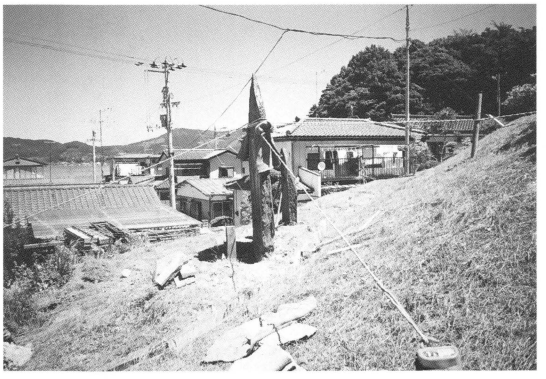
渡波地区には、江戸時代、金華山までの道筋に建てられた道標の一つがあります。これは、金華山道の祝田浜の舟渡場に設置されたもので、金華山へ行く船などの目標となる灯台のような役割を果たしたものとも考えられます。

この道標は、台形に石垣を作り、その上に火袋と屋根を設け、明かりをともせるようにしたもので、石垣部分には「永代燈」の名前と共に寄進者である塩田釜主の名前、寄進した年代、そして祝田から金華山までの陸路と海上との里程を記したものです。

この常夜燈の石垣部分が、永い年月の間にずれが生じ、地震などが起きれば崩れる可能性がありました。さらに崩れれば、祝田地区の生活道路に崩れ落ち、通行人に被害が及ぶ危険性が考えられましたので、石垣を積み直し、補修する必要が生じました。

工事は、石垣を一つ一つはずしていったん解体し、新たにずれを修正しながら石垣を積んでいき、また補修を行うものでした。

文化財はなるべく今残っている様子のままで後世まで残していくことが必要ですが、現状のままでは崩壊する危険性や、保存ができないと考えられるものについては、補修などをおこない後世まで永く残していくことが必要です。



平成十一年度 文化財めぐり

平成十一年度の文化財めぐりは、岩手県遠野市方面と北上市・水沢市方面、それに市内の牡鹿三十三所札所めぐりを実施しました。

第一回【遠野の文化財をたずねて】
日　時　平成十一年九月十九日
講　師　石垣　宏　文化財保護委員
参加者　四十三名

八時に市役所を出発し、東北自動車道を利用し、北上市を経由して遠野へ向かいました。

遠野では、まず、遠野市立博物館を見学しました。博物館では、山に囲まれた遠野の自然、歴史、馬を中心とした産業そして、柳田国男が著した遠野物語によって広く世に知られることとなった昔話の数々を見学し、遠野の風土や文化を知ることができました。

柳田国男が遠野に昔話の取材に来たとき泊まった旅館や、晩年住んだ家などを移築した施設であるとおの昔話村では、語り部が語る生の昔話を聞き、遠野の昔や、数多くの昔話に感心していました。

常堅寺は、カッパ狛犬といわれる頭の上がくぼんだ狛犬があるお寺で、河童が馬を川に引きずり込もうとした伝説が残るカッパ淵が近くにあります。川岸には河童を祀るほこらがあり、今にも河童が川からでてきそうな雰囲気がありました

また、その南側には遠野物語に安部貞任の子孫が住むと記された屋敷があり、遙か昔の出来事が脈々と生きていることを実感させられました。

伝承園は、最古の南部曲がり屋といわれ、国指定重要文化財に指定されている旧菊池家住宅を中心とした施設で、水車や遠野の民話を世に広めるきっかけを作った佐々木喜善の記念館などがあります。

次に見学した千葉家住宅は、日本十大民家の一つに数えられている南部曲がり屋で、その大きさは他を圧倒するものがあり、鬼が築いたと言われる石垣の上にそびえ立つように建てられた屋敷は遠くからもよく見えるほど大きなのものです。

遠野の文化財をたずねて

第二回【北上・水沢の文化財をたずねて】
日　時　平成十一年十月十日
講　師　石垣　宏　文化財保護委員
参加者　四十三名

石巻市役所をでて、東北自動車道を通り岩手県北上市・水沢市の文化財をめぐりました。

まず、岩崎城を見学しました。岩崎城は、中世、この地方に勢力を持っていた和賀氏が、豊臣秀吉に従わなかったための奥州征伐により失った自分の領地を取り戻すため起こした反乱の際、最後にたてこもった城で、今は、深い空堀や郭をぐるりと巡るように造られた土塁の一部などが残っています。

本丸があったところには天守閣のような形をした岩崎公民館が建てられ、中は、和賀氏関係や、隠れキリシタンなど岩崎地区の歴史に関する資料が展示されています。

みちのく民俗村は、昼食をとった展勝地公園のそばにあり、同じ敷地内には北上市立博物館があります。北上市周辺に残る古民家や学校などの古建築物を移築・展示しさらにこの敷地内にある仙台藩との藩境に築かれた境塚を見ることができる施設です。

仙台藩との境塚は、江戸時代に藩の境についてもめ事があったことから作られたもので、奥羽山脈から三陸海岸までおよぶといわれ、その総延長が約一三〇キロにもなります。山や川などの自然のものを境とせず、人為的に塚を造り、境界もほとんどなく、仙台藩と盛岡藩との境界についての考え方などを知る事ができる貴重な資料となっています。

次に訪れた水沢市には、胆沢城という古代の遺跡があります。古代、朝廷が東北地方を治めるための「鎮守府」といわれる役所として設置したものです。現在はその跡はほとんど残っていませんが、正方形に巡らされた築地塀の跡に沿って残るあぜ道や、鎮守府八幡宮など、その頃をしのばせるものが残っています。

水沢市内の武家住宅資料館は、水沢市が江戸時代、留守氏（水沢伊達氏）の城下町であった頃の武家屋敷を公開したもので、当時の武家屋敷の様子やその雰囲気が感じられ趣のあるものでした。ここのほかにも現在でも市内のあちこちに武家屋敷や狭い路地が残っています。また、水沢伊達家の家臣の家柄で、関東大震災の復興を推進し、「大風呂敷」の異名をとった後藤新平の生家も見学することができ、水沢が生んだ偉人を垣間見ることができました。

また、水沢は、古くから灌漑用水が造られてきた土地です。その中の「寿庵堰」は仙台藩士の後藤寿庵がつくったといわれているもので、このような用水は水沢地方で「堰」といわれています。

黒石寺は、「蘇民祭」がおこなわれることで有名なお寺で、また、平安時代に作られた仏像が残されているところでもあります。このお寺に現在残されている仏像は人々が遠い昔から残そうと努力した結果であるということで、お寺の方に仏像の意味、その大切さなどを詳しく説明してもらい、文化財の大切さ、そして

それを伝えていくことの重要さを学ぶことができました。

黒石寺からさらに奥に行くと、大きな茅葺きの屋根のお寺があります。

この正法寺は、江戸時代、総持寺、永平寺とともに「曹洞宗第三の本山」として栄えたお寺で、本堂の屋根は、茅葺きでは日本一の大きさといわれています。

また、現在も修行の道場として使われています。残念ながら屋根の茅の葺き替えのため全体を見ることはできませんでしたが、それでも建物やお堂の中の様子に、みな感慨深げに見入っていました。

北上・水沢の文化財をたずねて

第三回【牡鹿三十三所札所めぐり　ファイナル】

日　時　平成十一年十月十七日
講　師　佐藤雄一　文化財保護委員
参加者　三〇名

牡鹿三十三所札所めぐりは今回、水沼地区の札所をめぐり、真野の長谷寺で納めとなりました。

水沼では、水沼の板碑群、延喜式内社伊去波夜分命神社、それに、札所である龍泉院を見学しました。水沼の板碑群は、中世、鎌倉時代頃の板碑が残るところで、この場所に安楽寺という寺院があったという伝承が残り、過去に河原石にお経の文字を書き込んだ「一字一石経」というものが出土した所です。

延喜式内社伊去波夜分命神社は、延喜式という平安時代の法律に記された神社の一つで、石巻周辺には同様の神社が十カ所あり、それらは「牡鹿十座」といわれています。急な山道を登り切ったところに社殿がありました。

龍泉院は、市指定文化財龍泉院のイチョウがあるお寺で、その創建は中世にさかのぼる可能性がある古いお寺です。現在は、山門、本堂などしか残っていませんが、以前は多くのお堂が建ち並ぶ大きなお寺であったといわれております

また、真野では三十三所の納めの寺である長谷寺を見学しました。このお寺は、源義経が戦勝祈願をしたと言い伝えられている寺院で、以前は兜掛けの松があったということです。ここの観音堂が三十三所札所の納めとなっています。

ここのお寺には市指定文化財木造薬師如来座像があります。この仏像は、仏師の名前が「四条東洞院大仏師法眼覚経」と墨で書かれているもので、東北地方と京都の仏師との関わりが考えられるものです。

また、長谷寺の周辺は大伴家持の「露わけむ　秋の朝気は遠からで　都は幾日まのの萱原」で唱われた「真野の萱原」であるといわれ、山門前に群生している葦は都の方を恋しがってその方向にばかり葉を付けるといわれております。

今回も、多数の応募者があり、抽選で参加者を決定させていただきました。多数のご応募があったことを感謝するとともに、残念ながら今回参加できなかった方は、また、ご応募いただけますようお願いいたします。

今回の文化財めぐりでの見学に快く応じてくださった各寺院、施設の方々には紙上を借りてお礼申し上げます。

牡鹿三十三所札所めぐり

文化財標柱製作設置

石巻市内には、平成十二年四月現在、国指定文化財が二件、県指定文化財が三件、市指定文化財が二十四件あります。そのほかにも現在までのところ百カ所以上の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があることがわかっています。

文化財を保護するということは、先祖から伝わった財産（文化財）を将来まで伝えていくことにもつながります。また、文化財は一度なくなってしまうとそれを元のように復元することは非常に困難です。従って、目先のことにとらわれることなく将来のことを十分に考えた上で文化財の保護と開発とを両立させなければなりません。

石巻市教育委員会では、このような文化財をみなさんにお知らせするため標柱や、説明板を設置しています。文化財として指定、登録されている物や土地は、国民共通の財産ですので、開発等でその現状を変更する場合は法律や条令などに基づく届け出が必要になります。また、このような文化財での土木工事や、宅地の開発など現状を変えるようなことをおこなう計画がある場合は、できるだけ早く石巻市教育委員会に相談してください。また、遺跡の所在地についても、これらの標柱、説明板をご参考いただく他に「石巻市文化財マップ」や、「宮城県遺跡

地図」がありますので、お問いあわせください。

平成十一年度は市内の文化財のうち七か所に文化財標柱を設置しました。

今年度設置した文化財標柱と、その説明文は次の通りです。

延喜式内社　零羊崎神社

延喜式神明帳にみえる、いわゆる延喜式内社で、牡鹿十座の筆頭である。祭神は豊玉彦命。拝殿は江戸時代、牧山にあった長禅寺（牧山観音）の遺構である。

平形館跡

標高一八〇メートルの山頂に築かれた中世の城館。規模は小さいが、平場、空堀、土塁が形よく配置された山城の典型的な例であり、ほとんど昔のまま保存されている数少ない館跡のひとつである。館主は不明だが、安倍貞任の居館であったと伝えられている。

湊小学校遺跡

過去に蕨手刀（六～七世紀頃の柄がワラビのような形をしている刀）が出土している遺跡で、隣接する五松山洞窟遺跡との関連が注目される。

石巻市指定文化財　多福院板碑群

本板碑群八十八基は石巻指定文化財であり、当市および北上川流域の中世史を理解する上で欠くことのできないものである。

草刈山板碑群

本板碑群は、御所入草刈山地区から移転した大型の板碑群で、特に吉野先帝菩提碑と同じ「奉為」と刻される表現は、その年代を考える上で貴重である。

釜西古墳

この遺跡は元来円墳で、高さ四メートル、直径役十五メートル程度あったものと思われる。しかし、残存する墳丘が半壊し変形しているため、築造年代や埋葬状況については不明である。

京ケ森館跡

標高約二八〇メートル、市内にある館跡としては最も高いところにある。北と南にはそれぞれ大きな空堀が敵の侵入を防ぎ、特に南側には門跡、通路跡と思われるくぼ地も残っている。その昔、安倍貞任が源義家と戦ったときに構えた館であると言い伝えられている。

平成十一年度
文化財防火デー

昭和二十五年一月二十六日は奈良県の法隆寺金堂が火事により全焼し、貴重な壁画が焼損してしまった日です。

この火災を機に、毎年一月二十六日を文化財防火デーとして全国で文化財の防火訓練などが行われます。

石巻市教育委員会でも、貴重な文化財を火災から守り、また、文化財を愛護する思想を広く普及させるため、毎年文化財防火デーに指定文化財を対象にした防火訓練を実施しています。平成十一年度は、市指定文化財奉納絵馬「黒馬の図」「白馬の図」と「長禅寺扁額」のある、牧山の零羊崎神社を対象として訓練を行いました。

奉納絵馬「黒馬の図」「白馬の図」は、いずれも江戸時代につくられたもので、どちらもよい天気が続くことを願って奉納されたものと考えられています。この絵馬は保存が良く、かつ市内の絵馬の中では大きなものです。

また、「長禅寺扁額」は、江戸時代、零羊崎神社の社殿が長禅寺というお寺の本堂であったときのもので、中国の支那悦峯の書で、書道史上でも貴重なものです。明治時代になり長禅寺が廃寺になって以降、零羊崎神社の拝殿として使われており、寺院の本堂であった頃の面影を残した建物となっています。

天気は良かったのですが、雪が残る寒い日に、零羊崎神社の拝殿から出火しているのを宮司が見つけ、初期消火するものの失敗し、文化財に延焼のおそれがあるという想定で消火訓練、文化財の搬出訓練と行われました。

今回は、今までと違って水の確保が難しい場所での消火訓練とあって、文化財の搬出、消防による消火訓練と、みな真剣な面もちで訓練に参加していました。

零羊崎神社の桜谷宮司を始め、氏子のみなさん、それに消防署、消防団のみなさんには寒い中訓練にご参加いただきありがとうございました。紙面を借りてお礼申し上げます。

石巻城跡の発掘調査

本篇は、平成九年度から平成十年にかけて実施しました石巻城跡の発掘調査の成果報告です。平成九年度に調査した地点の調査概要については、すでに、『石巻市文化財だより』第二十七号で報告されていますが、その後、平成十年度に新たな地点の調査を実施したため、今回は、これらの調査成果をまとめて報告することとします。なお、報告の作成段階で、既に報告されている内容に変更が生じた部分もありますが、これらの内容については、本篇が優先されます。

Ⅰ　調査実施要綱

【遺跡所在地】
石巻市日和が丘二丁目　他

【調査対象面積】
（第一地点） 約一二〇〇㎡
（第二地点） 約　六〇㎡

【調査期間】
（第一地点） 平成九年十一月二十五日～三月三十一日
（第二地点） 平成十年十一月四日～平成十二年二月三日

【調査主体】
石巻市教育委員会

【調査担当者】
（第一地点） 石巻市教育委員会
社会教育課文化係
主任主事　木暮　亮
（第二地点） 石巻市教育委員会
社会教育課文化係
主任主事　木暮　亮
同　主　事　阿部　篤
同　嘱託員　古澤　亜希子

【調査作業員】（順不同）
（第一地点）
邊見清二　斎藤初弥　斎藤よし子
（第二地点）
岡　千恵　加藤寿美子

【調査協力】
鹿島御児神社
社団法人　石巻市シルバー人材センター

Ⅱ　調査に至る経過

1　第一地点

平成八年度に、石巻市建設部都市計画課から石巻市教育委員会に対して、石巻城跡および日和山神社経塚（きょうづか）の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）内（第1図　15・83）において、日和山公園駐車場を新たに造るための工事の計画がある旨の連絡がありました。これを受けた石巻市教育委員会では、破壊されてしまう恐れがある日和山神社経塚および石巻城跡の、発掘調査による「記録による保存」のために、平成九年十一月から発掘調査を開始するに至りました。この結果、土塁（どるい）や空堀（からぼり）など、中世の館跡（たてあと　山城）に見られる遺構が発見され、中世葛西氏の居城があったと伝えられていた日和山における館跡の存在が、埋蔵文化財発掘調査という考古学的な方法により明らかとなったため、空堀の部分を埋め戻し、そのまま保存することとなったわけです。

2　第二地点

平成十年十月に、石巻市建設部都市計画課から、日和山公園から鹿島御児神社への参道の切通しの崩落防止工事を実施する旨の連絡がありました。このため、掘削工事の際に立ち会って見たところ、土塁の一部とみられる断面を確認したため、急遽、記録による保存を目的とした調査を実施しました。この結果、この土塁が、第一地点から南に向かって続く、ひと連なりの土塁である可能性が強くなってきました。

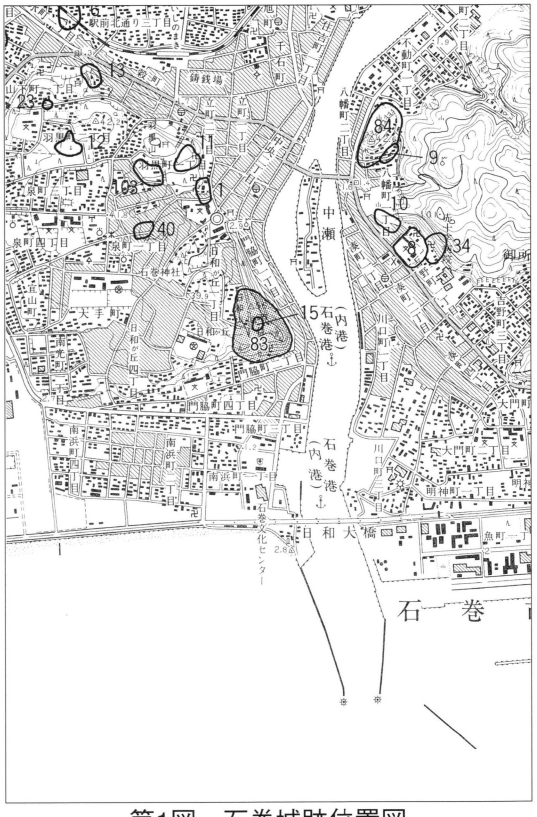
Ⅲ　遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1　遺跡周辺の地理的環境

石巻平野は、北上川によって運ばれてきた土砂が堆積してできた平野です。この平野には、それらの土砂が、海の波によって侵食されたり、あるいは打ち上げられたりして形成された「浜堤（ひんてい）」と呼ばれる帯状の土地が、海岸線から内陸部に向かって幾重にも連なっています。このような浜堤は、石巻においては、特に古代からの人々の生活の舞台であったことがわかってきました。

石巻城跡が立地している日和山（丘陵）は、この石巻平野の最も南東に位置する独立した丘陵で、この東側には、旧北上川が南に向かって流れており、約七〇〇m南に行ったところで太平洋に注いでいます。石巻城跡は、この日和山丘陵の最も南東部分の、標高約六〇mの縁辺部に位置しています。この場所は、石巻駅から大体一・二kmの地点になります。

ところで、この日和山丘陵の基盤を形



第1図　石巻城跡位置図

成している土地は、その大部分が新生代第三紀中新世に形造られたもので、花崗岩や砂岩、頁岩、安山岩などといった岩石で成り立っている事がわかっています。一方、地形的に見れば、旧北上川を挟んで対岸に位置する牧山などの土地の形成は、中生代であり、これらの地質には大きな違いが見られます。また、日和山丘陵の西側に広がる石巻平野には、先ほど述べた浜堤が海岸線と並行して形成されており、「浜堤列(ひんていれつ)」と呼ばれ、その間には「後背湿地(こうはいしつち)」と呼ばれる低地帯が広がっています。

2　石巻城跡をめぐる歴史的環境

石巻城跡は『仙台領古城書立之覚』という書物にある「葛西清重が築城し、代々葛西家の居城であった」という意味のくだりなどに代表されるように、かつては葛西氏の居城であったという解釈がなされていますが、文献上の確かな証拠はありません。

葛西家はもともとは豊嶋家のながれを汲む一族であり、下総の葛西荘（今の東京都葛飾区等）を領地として「葛西」と称し、葛西氏の祖となりました。

平安時代の終わり頃（文治五年　一一八九年）、源頼朝は、平泉の藤原泰衡が源義経をかくまい、鎌倉に反抗したことを口実に、大軍を引き連れて東北に攻め込み、平泉において藤原氏を破り、滅亡させました（奥州征伐）。また、この戦いの後、東北地方の支配に着手し、この年の九月に、平泉において奥州征伐に手柄があった家臣に恩賞を与え、多くの武士たちへの東北各地の支配権を認め、鎌倉の武士団の東北地方への移住のきっかけを作ったのでした。この結果、鎌倉武士は相次いで東北の地へ移住することとなり、各地を「地頭」として支配し、未開地を開墾していきました。

葛西清重は、この「奥州征伐」において戦功があった武士の一人で、これにより陸奥国の気仙・胆沢・磐井・牡鹿・本吉の五郡と他に二保を与えられ、さらに奥州総奉行の一人となって戦後処理にあたったとされています。

一年後の建久一年（一一九〇年）、平泉の藤原氏の残党であった大河兼任の乱が鎮圧され、奥州地方の事情が安定すると、清重は鎌倉に帰り、幕府に出仕しています。

『日本城郭大系3　山形・宮城・福島　新人物往来社』の藤沼邦彦氏の記述などによれば、葛西清重が鎌倉に戻った後、再び奥州に行った形跡はないため、彼が石巻城を築き、そこに居城したという証拠はないとされています。このことから、当時与えられていた所領を管理・支配していたのは一族の誰かか、代官などではなかったかと言われています。

また、二代清親、三代清時も鎌倉に居住していたため、葛西氏が奥州に移住したのは、四代の清経（鎌倉時代　一二七七年前後）の代ではなかったかと推定されます。今回調査などで、その存在が明らかとなった石巻城が、仮にもし、葛西氏の城であったとするならば、この城が築城されたのは、この清経の時代ではな

第2図　石巻城跡および周辺の地形

かったかと推察されるわけです。この後、清経と平泉白山別当の顕隆の土地争論や、五代宗清と中尊寺・毛越寺との所領争いなどを経て、宗清と六代の清貞は南北朝の争いで南朝方に付き、陸奥国司の北畠顕家をはじめとする奥州勢力の主力となっていきます。葛西氏の勢力はその後も拡大され「葛西領三十五万石」と称されるようにまでなっていくのです。

一方、葛西氏は中世後半以降に、居城を石巻から領地の中心地に近い登米寺池に移したとも言われます。

このように隆盛を誇った葛西家ですが、十七代の晴信の時、豊臣秀吉による小田原北条攻めに参陣しなかったため、天正十八年（一五九〇年　安土・桃山時代）八月に所領を没収され、事実上の滅亡となりました。

次に、日和山周辺の中世関係の遺跡に目を向けて見ましょう。

まず、日和山の北西側に広がる羽黒山には明神山経塚があり、平成四年に塚の頂上にあった切り株が落雷に遭い、その中から中世のものと考えられる大甕の破片が発見されています。この経塚については諸説ありますが、一説によれば、中世墳墓なのではないかとの見解も出されています。旧北上川を挟んで対岸の湊地区には、湊館山館跡をはじめとする館跡がある他、一五七〇年（元亀元年　安土・桃山時代）開山と言われている多福院や、建武の新政を実施した後醍醐天皇を奉った「吉野先帝菩提碑」などがあります。さらに多福院の裏手の丘陵は通称「阿弥陀が峰」などとも呼ばれ、慈恩院板碑群や多福院板碑群、草刈山板碑群など鎌倉時代から室町時代にかけて造立された可能性がある板碑群が軒を連ねています。

これら、日和山周辺の遺跡とは別に、旧北上川をやや遡った稲井地区には、南境館、大瓜館、鷲の巣館、三日坊館、水沼古館などをはじめとする多数の城館が認められているほか、河北町との境周辺にも複数の板碑群が存在しています。特に板碑に関しては、様々なものを全て含めると、四〇〇基以上にものぼると考えられます。

以上の事実から、石巻市内の中世関係の遺跡や遺構は、石巻城跡はもとより、対岸の湊地区、あるいは稲井地区にまで及んでいたと言えます。

さて、石巻城跡の本格的な発掘調査が実施されたのは、昭和五十五年の「石巻総合文化センター（仮称）建設候補地選定に伴う発掘調査」が初回です。この調査の結果、鹿島御児神社の西南側の緩斜面から多数の建物の柱跡と考えられるピット（小穴）が発見された他、人為的に整地された部分なども見つかっています。残念なことに、時期決定の証拠となり得る土器などの遺物が発見されていないため、明確な根拠はありませんが、建物跡の構造から、中世のものである可能性も否定できないと考えられています。

Ⅳ　第一地点の調査

1　調査方法と調査の経過

まず、発掘調査のために、調査対象地域の樹木を伐採し、表土を重機によって剥ぎ取る必要がありました。当初、調査対象地域内には、様々な樹木が植わっており、中にはかなりな樹齢を数えるものも少なくない様子でした。駐車場整備に伴う発掘調査の実施を石巻市文化財保護委員会に諮問したところ、樹木の伐採は、日和山の自然保護上好ましくないという回答があり、緊急的な措置として、伐採対象となる樹木の植物調査を実施しました（第1・2表、第3図）。

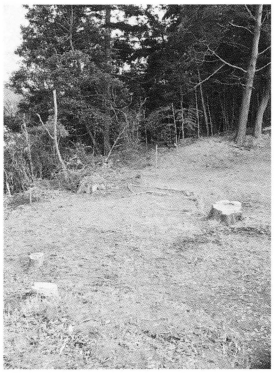
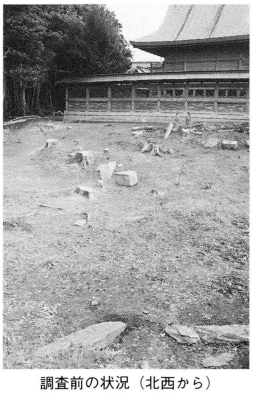
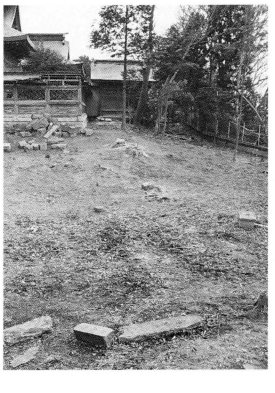
この後、重機（バックホー）によって、発掘調査対象地域（東西約四〇m、南北約三〇m）の表土を剥ぎ取りました。

調査対象地点は、鹿島御児神社の拝殿のすぐ北側の緩やかな斜面と、日和山神社経塚を境にして、数mほど急激に落ち込んだ部分でした。

本格的な調査は、まずこの緩斜面をジョレンによってきれいに薄く削り、遺構の有無を確認しました（遺構精査）。その後、経塚を半分に立ち割る形でトレンチ（溝）を入れ、断面の土層堆積状況などを確認しましたが、判然とせず、結果的には西側半分を削り取って確認しました。

緩斜面から急激に落ち込んだ部分（北側の公園との境にあたる平坦地）の精査を実施したところ、明らかに遺構と考えられる帯状の黒色土帯が、上部の緩斜面をめぐっていることが判明し、空堀ではないかという結論に達しました。

一方、市道に面した西側の斜面を重機により掘削したところ、断面に黒褐色土と黄褐色土が交互に積み重ねられたと考えられる土層を確認し、この層が人為的に積み上げられた土塁であるという結論に達したわけです。また、経塚の断面からもこのような土塁と同じ土層の堆積状

調査前の状況（北西から）

況が確認されたため、土塁の一部であることが判明しました。

以上の遺構の確認の後、空堀を部分的にトレンチ掘削し、断面の土層堆積状況を確認しました。さらに、地形の状況や、土層堆積状況、遺構等の平断面を写真撮影や図面作成により記録保存し、空堀については砂を入れて埋め戻し、そのまま保存しました。

2　植物調査の経過と結果

植物調査実施に至る経緯については先に述べたとおりです。なお、調査は、当時石巻市文化財保護委員であった　斎藤紀氏（前　石巻専修大学教授）に担当をお願いし、発掘調査担当者が補佐をつとめました（第3図、第1・2表）。

調査は、樹木の種類の同定、胸高直径（胸の部分での幹の直径）の計測、および樹木の高さ（推定高も含む）の計測を実施したうえで、写真撮影を実施しました。

調査の結果、樹種としては、ケヤキやクヌギ、モミジなどの落葉広葉樹や、スギ、ヒノキなどの針葉樹も目立ちました。これらの樹木は、日和山一帯に植生しているものであり、一般的には植林によって生育されたものである可能性が強いと考えられます。一方、これらのほかに、タブノキやシュロダモといった、仙台湾の海岸部に生育する暖地性の植物があることに気が付きます。石巻地域の海岸部や離島でもこのような植物が群落を作って生育している状況があり、注目されます。今回の調査対象地域内で見つかったものについては単体であるため、種子などの移動によって生育したものと考えられますが、詳細については不明です。

3　樹木伐採後の調査区の状況

鹿島御児神社から調査区に至る部分と、日和山神社経塚付近に石造物の分布が見られます。

鹿島御児神社付近に分布している石造物については、かつて日和山神社があった段階で使用されていたと考えられる石柱や、狐を象（かたど）った置物などであり新しいものであると判断されました。しかし、経塚周辺にあった石造物に関しては江戸時代にまで遡る可能性があります。特に庚申供養塔の中には「明和六年

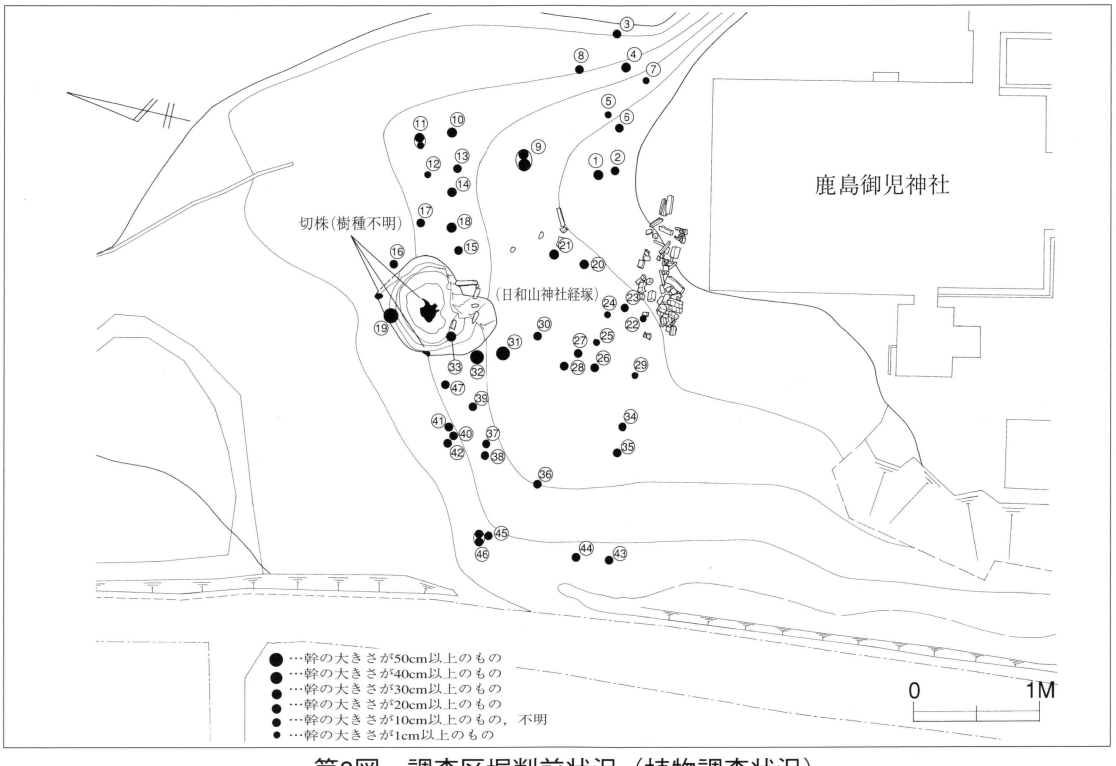
第1表　平成9年度石巻城跡発掘調査地点　植物調査結果

No.	樹木の種類	幹の大きさ（胸高直径）(cm)	推定高（m）	備　　考
1	ケヤキ	36.0	18.0	
2	コブシ	18.0	15.0	
3	シュロダモ	―	2.0	
4	タブノキ	33.0	18.0	
5	ケヤキ	2.8	20.0	
6	ケヤキ	12.0	14.0	
7	ヤブツバキ	2.0	2.0	二股に分かれている
8	ヒノキ	10.0	6.0	
9	ウワミズザクラ	①37.0　②40.0	19.0	二股に分かれている
10	スギ	38.0	10.0	
11	スギ	①20.5　②2.0	9.0	
12	スギ	―	5.0	
13	スギ	16.0	9.0	
14	コブシ	25.0	11.0	
15	クヌギ	11.0	10.0	
16	エノキ	16.0	3.0	
17	ヤブツバキ	10.0	1.5	
18	シュロダモ	34.0	1.0	
19	ケヤキ	60.0	17.0	二股に分かれている
20	クマノミズキ	23.0	12.0	
21	クマノミズキ	33.0	6.0	枯れている
22	ヒノキ	8.0	―	
23	ヒノキ	11.0	―	
24	ヤブツバキ	1.0	1.3	
25	ヒノキ	1.0	5.0~7.0	
26	ヒノキ	15.0	5.0~7.0	
27	ヤブツバキ	―	5.0~7.0	
28	ヒノキ	12.0	5.0~7.0	
29	ヒノキ	9.0	5.0~7.0	
30	ヒノキ	12.0	5.0~7.0	
31	ヒノキ	50.0	1.0	
32	オオモミジ	52.0	14.0	
33	オオモモジ	35.0	13.0	
34	クマノミズキ	―	8.0	
35	クマノミズキ	―	14.0	
36	クマノミズキ	―	13.0	
37	ヒノキ	―	14.0	
38	シュロダモ	―	7.0	
39	シュロダモ	―	12.0	
40	ヒノキ	―	8.0	
41	ムラサキシキブ	―	―	
42	ムラサキシキブ	―	―	
43	ドイツトウヒ	―	15.0	
44	ドイツトウヒ	―	4.0	
45	ヒマラヤスギ	―	6.0	
46	ケヤキ	―	17.0	二股に分かれている
47	アオキ	―	―	

調査区東側の植物の状況

第2表　樹　種　集　計　表

樹木の種類	本数(本)	樹木の種類	本数(本)
エノキ	2	オオモミジ	2
クマノミズキ	5	ヤブツバキ	4
コブシ	1	ウワミズザクラ	1
シュロダモ	4	スギ	3
タブノキ	1	コブシ	1
ヒノキ	10	ケヤキ	5
ヒマラヤスギ	1	アオキ	数本
ムラサキシキブ	2	ドイツトウヒ	2
合　　計	24	合　　計	20以上



第3図　調査区堀削前状況（植物調査状況）

（一七六九年　江戸時代後期）十月十二日」の年号や「寛政十年二月十六日」という年号が読み取れるものがありました。さらにこの、明和六年の供養塔の裏には「田畑屋云々」の銘があり、また、寛政十年のものには「相沢屋東助」の銘があり、寄進者を特定できる可能性があります。日和山神社経塚およびその周辺の石造物は、経塚の南側に集中しており、こちらが正面であったことを推測させるものです。

日和山神社経塚周辺の石造物

4　調査区の基本土層堆積状況（第5図）

ここでは、発掘調査区の堆積土の基本とした土層堆積状況を、調査区南壁（鹿島御児神社との境界部分）において作成した土層断面図（第5図）を用いて説明することとします。

まず、基本土層は合計32層に分けられました。ただし、この数は、遺構内部の土層等は除きます。さらに、調査区の西側にある大きな切り株の下の土層は、かなり込み合っていますが、これは樹木が根を張ることによって土中に何らかの影響を与えたものではないかと考えられ、本来はもう少しまとまっていたのではないかと考えられます。このように考えた場合、土層は全体的には20層前後に分層されるのではないかと思われます。

次に、層の堆積は、東側から西側にやや高まりを見せた後に下降し、土塁へと至ります。よって、この土層断面図から読み取れる調査区の地形は、中央部が最も高いということになります。

それでは、これらそれぞれの土層について、大まかに説明を加えてみたいと思います。第1層から5層くらいまでは、褐色ないしは暗褐色の腐食土（木の葉などが堆積してできた土）です。これらの層の中間に、黄褐色の土が存在している部分もありますが、それらは木根などによって撹乱を受けた部分もあるのではないかと思われます。6層以下には、黄褐色土を基本とした土層が堆積しています。この黄褐色系の土は、酸性の風化した火山灰土（ローム）である可能性が考えられ、洪積世（今から約一万年前後）に堆積したと考えられますが、日和山丘陵の堆積土壌についての詳細ははっきりしません。また、東側の切り株から土塁の直上面にかけて、黒褐色土の堆積が見られますが、これは土塁構築後の使用面（整地層）などの可能性も考えられます。

5　発見された遺構と遺物

石巻城跡発掘調査第一地点からは、調査区を南東から北西にめぐる空堀と、それに沿うように構築された土塁が発見されました。土塁は調査区南壁から始まり、調査区北西側で途切れています。この状況は、土塁自体を意図的に途切れさせたものか、あるいは後世に破壊された部分

なのかは不明です。一方、当初、日和山神社経塚と称されていた土饅頭状の高まりは、実は、いったん途切れた土塁の続きであり、それを後世に塚として転用していたという事実が明らかとなりました。

次に、この地点の遺構等について、地区別に説明を加えていきたいと思います。

（一）土　塁

まず、土塁についての基本的な事柄をお話ししておきます。

そもそも「城」とは「土を盛った施設」のことを言い、土塁は堀とともに「塁線」を形成し、城（城郭）の防備のための「壁」であり、また一方では敵兵に対しての攻撃台となっていました。

中世以前からの土塁の構築方法として、いわゆる「タタキ土居（どい）」という、崩壊を食い止めるために、堀を掘り上げた土をたたいて固める方法が各地で採用されました。また、この後、中国や朝鮮半島から「版築土塁（はんちくどるい）」という築壁技法が伝えられ、わが国でも盛んに採用されるようになりました。この版築土塁の基本的な構築方法は次のとおりです。

①土塁の芯にあたる所に木柱を立てるなどする。

②土塁の壁となるように左右に板を渡して土塁がめぐる壁を箱のような形にする。

③その箱状の中へ下から順々に土を投げ入れる。この土は、粘土質・小砂利・砂・腐植土・赤土（ローム）などを交互に、層位をもって入れ、一層ごとに水等を混ぜて突き固める。

④土を突き固める途中に、柱などをあらかじめ埋め込んだりして、土を投げ入れて突き固める。

⑤左右に板の上部まで土が積まれた後、突き固めの状態を確認して板を取り除く。

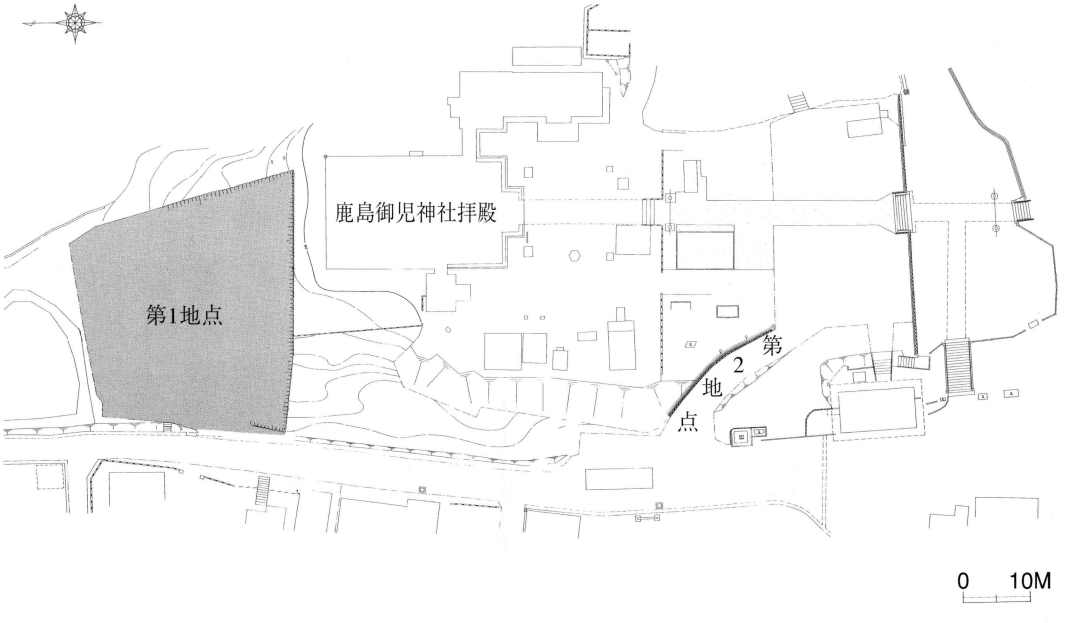
⑥板を取り除いた後の斜面を、改めて土で覆って固める。

また、特に中世においては、「掻き上げの城」などとも呼ばれるように、堀を掘り上げた土や、館などの造成や整地などに伴う土を、粘土質の客土とともに交互に積み上げた土塁が数多く見られます。

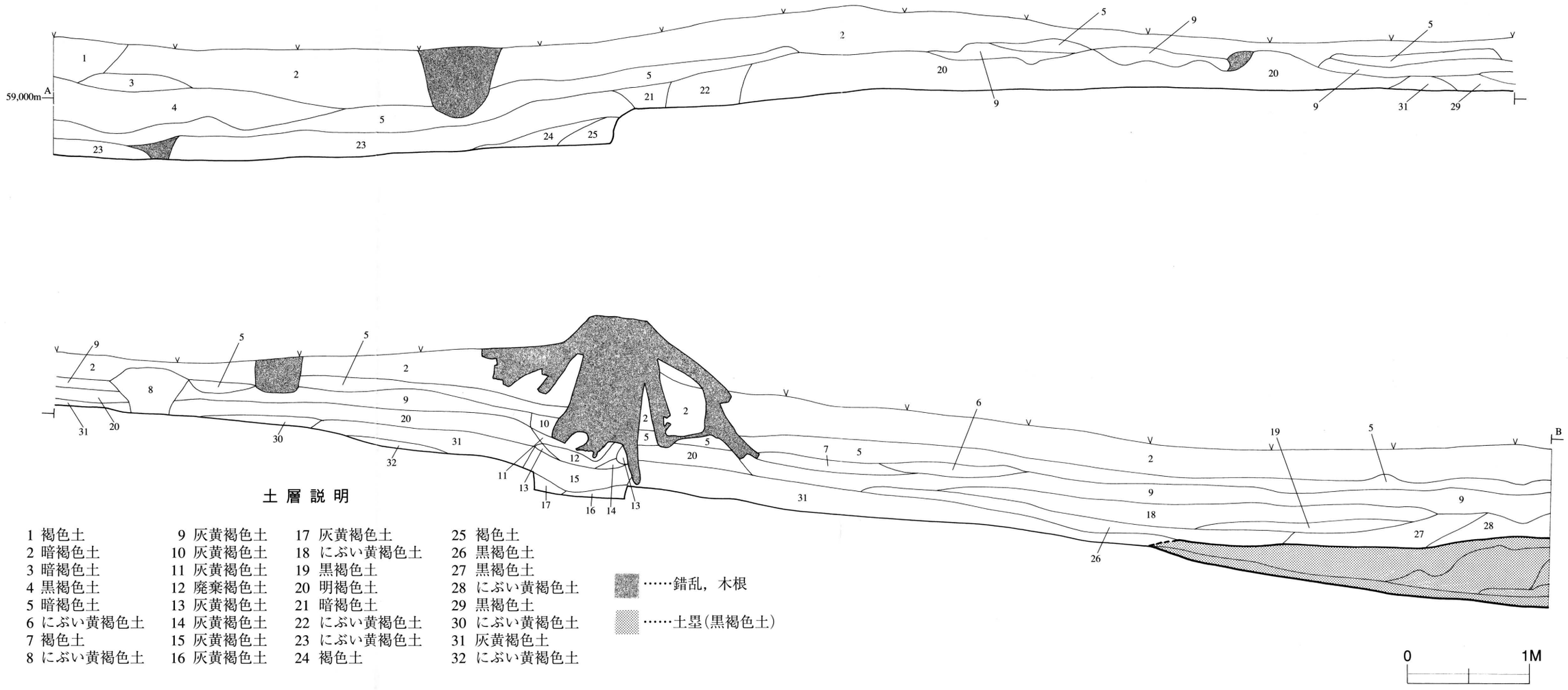
〔南西側土塁〕（第6・7図）

発掘調査地区の南壁から、調査区の西側にかけて検出した土塁を、「南西側土塁」と呼んでおきます。先程も若干述べましたが、この土塁は、調査区の南壁から北へ伸びるフェンス（ブロック積み）を取り外すにあたって、南壁に沿って東西にトレンチを掘削した結果（第6図　C―D断面）、発見したもので、これらの部分での残存していた長さは約一二mありました。

第7図の左上に掲載してある土塁の断面図は、調査区南壁にかかって発見した土塁の断面状況図です。また、この断面図は第5図から続く一連の図面であり、土塁を構成する土層は、基本土層の第26・27・28層よりも下に構築されており、また、第31層を切っていることがわかります。また、断面が調査区の東側断面にかかって発見されていることから、この土塁がここからさらに南方へ伸びている可能性が考えられます。



第4図　調査地点位置図



土層説明

1 褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 黒褐色土
5 暗褐色土
6 にぶい黄褐色土
7 褐色土
8 にぶい黄褐色土
9 灰黄褐色土
10 灰黄褐色土
11 灰黄褐色土
12 廃棄褐色土
13 灰黄褐色土
14 灰黄褐色土
15 灰黄褐色土
16 灰黄褐色土
17 灰黄褐色土
18 にぶい黄褐色土
19 黒褐色土
20 明褐色土
21 暗褐色土
22 にぶい黄褐色土
23 にぶい黄褐色土
24 褐色土
25 褐色土
26 黒褐色土
27 黒褐色土
28 にぶい黄褐色土
29 黒褐色土
30 にぶい黄褐色土
31 灰黄褐色土
32 にぶい黄褐色土

……錯乱，木根

……土塁(黒褐色土)

東側の状況

西側の状況

第5図　調査区南壁土層断面図

断面から考えられる土塁の幅は、約九・八mあり、直接地山（遺構等が最終的に掘り込まれた面（ここでは黄褐色ロームの面）の上に構築された可能性があります。このことから、調査段階で残っていたと判断される土塁の、最終段階の地表面からの高さは一・三m程度であったと判断されます。

土塁の積土は、地山面から見て黒褐色土→黄褐色土→黒褐色土の順に、ほぼ水平に積まれ、その上を腐植土（黒褐色土）が覆っていると考えられ、先に述べた「版築土塁」の様相を見て取れます。

断面図から見た土塁の構造としては、中央部の黄褐色帯の右側と、下層の黒褐色帯の右側に六〇cmほどの平坦面が認められます。城郭の施設の中に犬走（いぬばしり）というものがあり、土塁や斜面上に幅一間ほどの平坦面を構築し、城へ

南壁土塁・空堀断面

這い上がった敵兵がこの上に立つと、上から鑓（やり）で突かれるという機能を目的として設置されたものです。今回発見した土塁における平坦面もこの可能性があるのではないかと考えられます。

一方、この土塁は、一回で構築したのか、それとも作り替え等があったのかということも問題となってきます。後に述べますが、空堀では、部分的にせよ、最低一回は作り替え（再利用も含む）があったのではないかと考えられる断面の痕跡を発見しており、土塁についてもそういった可能性がないとは言い切れません。今回の土塁の断面については、一度に黒色土→黄褐色土→黒色土というふうに積まれた可能性や、はじめに黒色土が積まれ、時期を隔てて黄褐色土→黒色土が積まれた（下部の黒色土とその上の土との積方の違いから）可能性、あるいは黒色土→黄褐色土と構築した後、時期を置いて上部の黒色土が積まれた可能性などが考えられますが、決定的な証拠に欠けるため、はっきりしません。

一方、フェンスの東側の、調査区東壁にかかって、北方に伸びるやや高まった部分を検出しています。微妙な高まりであったため、写真等でも状況をわかりやすく見せることができないのですが、基本土層中の第二十六層に相当する黒褐色面です。しかし硬質で、ジョレンでも非常に削りにくかったことを記憶しています。この層は、ほぼ水平な堆積をしていることや土塁に相当する層の直上に位置しており、硬質であることなどから、土塁に伴った整地層の可能性も考えられます。

〔日和山神社経塚・東側土塁〕（第7図）

日和山神社経塚と称されていた土饅頭状の高まりは、直径約九・二m、高さ約二・四mを測る不整形をしており、南東側に崩落が見られました。また、頂部に巨大な切り株（樹種不明）が残っており、年輪を確認しましたが、判然としませんでした。

この塚は、かつてこの敷地内に日和山神社の拝殿等があり、それに伴う形でこの高まりが存在していたため、この名称で呼ばれたものと考えられます。前述にも若干触れましたが、この付近から「明和六年　十月十二日」や「安政十五年十一月吉日」、あるいは「寛政十年二月十六日」などの造立年号を刻印した庚申塔が複数見つかっており、日和山神社とともに近隣の住民による信仰の対象となっていたと考えられます。

今回発見した土塁は、日和山神社経塚を断ち割って断面を確認した結果発見した土塁で、南西側土塁とは、同一面に構築されているため、一連のものと考えられます。しかし、南西側土塁との間には、積土等が全く残っていなかったため、連接した形の土塁であったのか、あるいは中間に何らかの施設が存在したのかは判然としません。一方、この土塁の東側については、この先、土塁の積土が残っていなかったため、はっきり確認することはできませんでした。しかし、調査区南壁の東側と、調査区東壁の南側の断面を確認してみたところ、版築状の積土こそ確認することはできませんでしたが、部分的にせよ土塁を覆っていた土と考えられる黒褐色土と、地山とは異なる黄褐色土などを確認したため、南東方向へ伸びる可能性があります。

土塁の断面形は、北側から大体四五度の角度をもって立ち上がり、五〇cmほどの平坦部を経た後、さらに緩やかに立ち上がり頂部に至り、南側は、全体的に緩やかに下るという形状を成しており、確認した幅は九・二m、地山から頂部までの高さは一・六mを測ります。

積土等の構造は、地山直上に黒褐色土を積み、さらに黄褐色土と黒褐色土を交互に積み、また黒褐色土を積んで上面を腐植土で覆っており、全体的には「版築土塁」の構造を成しています。一方、黄褐色帯の中間に薄い黒褐色帯が観察でき、その上部と下部の黄褐色帯の積み方に若

東側土塁断面

干の相違が認められるため、この上部と下部との間には、南西側土塁の部分で指摘した、時期的な差異があった可能性も考えられます。また、北側の立ち上がり部分に認められる平坦面も、前述した「犬走」に関する施設である可能性があります。

以上の点を総合すると、土塁の構造上においては南東側土塁との間には大きな差異は認められません。よって一連のものと考えられるわけです。

(二) 空　堀

中世（特に鎌倉時代～室町時代）の城は、敵の攻撃のしづらい山の頂上や小高い尾根の上に築かれることが多く、そこに平場（ひらば　地面を削ったり、盛ったりして平坦にした場所）を構築して、曲輪（くるわ　建物を建てたり、兵を駐屯させたりする平場）にし、その周囲に様々な防御施設を設けます。たとえば、敵がまっすぐに攻めて来ないように空堀を掘ったり、土塁を構築したり、あるいは敵を攻撃するための足場として腰曲輪（こしぐるわ　斜面の途中を削るなどして造る平地で、階段状に構築される）が造られたりします。以上のように、中世に築かれる城は、自然の地形を最大限に活用し、最小限の工事で、最大限の防禦効果を得られるように工夫されているのです。これらの城は、戦闘の際に使用されるいわば臨時的な城の基本構造と考えられます。一方で、領主が日常生活をする城を館（たて）と呼んでいます。当然ながら、この館にも、空堀や土塁をめぐらすなどの防御施設が存在しているわけです。そして、このような城や館を（中世）城館と呼んでいるのです。しかし、城と館の呼び方を区別せずに、ただ「館」と呼んでいる場合もあります。

土塁とともに、堀は城の防禦ラインを形成する重要な施設でした。いわゆる防禦を目的とした堀は、たとえば弥生時代における環濠集落などに代表されるように、原始・古代から存在していましたが、中世になって山城が出現すると、堀は弓や飛礫などを防ぎ、完全に戦闘行為を目的とした防禦施設となったわけです。

〔南西側空堀〕（第6・7図）

調査区南壁断面（Aトレンチ）からBトレンチ直前までの空堀を南西側空堀と仮称しておきます。底面まで実際に掘りきったのは、トレンチの中のみであり、そのほかの部分については、堀の方向を確認したにとどめました。

まず、堀は、調査区南壁から北方向に延び、それから東側に大きく折れ曲がって行きます。北東に行くにしたがって、堀幅が狭くなるのは、もともとあった堀の開口部の標高が高くなり、同じ標高での検出面では、堀の上部が残存している場合と、下部に近い部分しか残っていない場合があるからとも考えられますが、Aトレンチにおける堀の断面形とBトレンチにおける断面形は、かなり異なっているばかりでなく、堀の底面の標高値もそれほど変わらないため、この場合には、当初からあった堀自体の幅が場所によって異なっていると考えるべきではないでしょうか。

次に断面形についてですが、調査区南壁で観察した堀の断面形は逆台形を呈し、いわゆる「箱堀（はこぼり）」の形状である可能性があります。また、壁の傾斜は西側よりも東側のほうが緩やかであることがわかります。調査時に確認された面での堀の上幅は約五・五mあり、底面の幅は約一・六mを測ります。さらに、この堀で言えば、堀の西側の端部から土塁の頂部までの距離は、実際の戦闘行為に際して敵と味方が向かい合う距離であるため「実効堀幅」と呼ばれており、約十二mあります。戦国時代には、鑓（やり）の出現によって、堀の幅は次第に広くなり、長柄鑓（ながえのやり）が戦力の主流になると、長柄の二間半～三間（十二～十四m）の長さで戦闘できる距離（敵方・味方両兵の鑓先が触れ合う距離）の堀幅となると言われており、この実効堀幅はこれに合致します。

調査区東壁（Aトレンチ）空堀断面

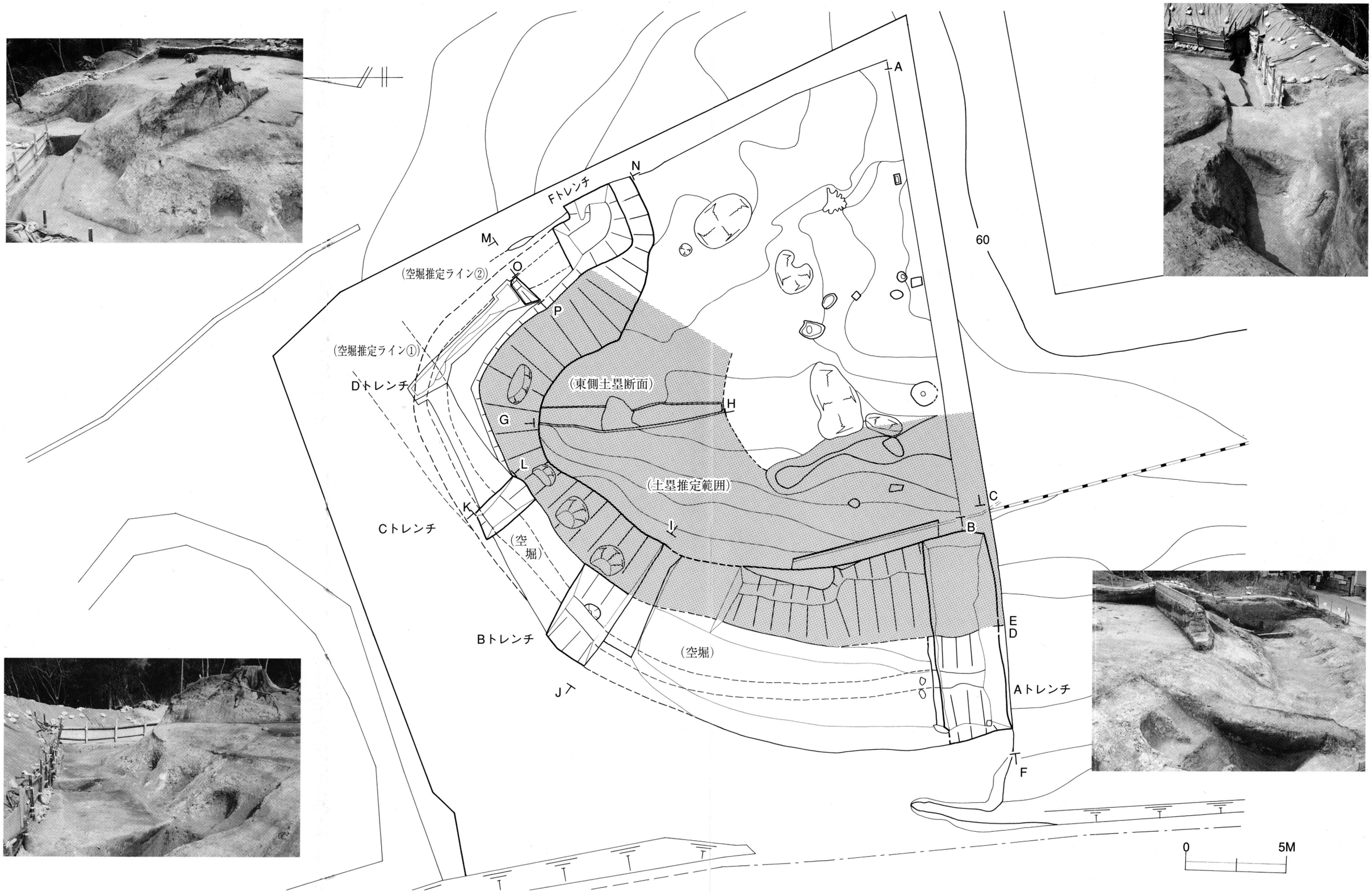
堀の堆積土についてはそれぞれ、黒褐色土・赤褐色土・明黄褐色土・暗褐色土等を基調とする層に分けられますが、黒褐色土は腐植土、赤褐色土は地山等の露出面、明黄褐色土は土塁の積土の一部などが崩落したものであると推察されます。特に、赤褐色を基調とする堆積土中に観察された黒褐色土帯については、その上部と下部とでは堆積土の質が異なっているため、この堀の底部が埋没した後も再利用された可能性が考えられます。

〔北西側空堀〕（第5・8図）

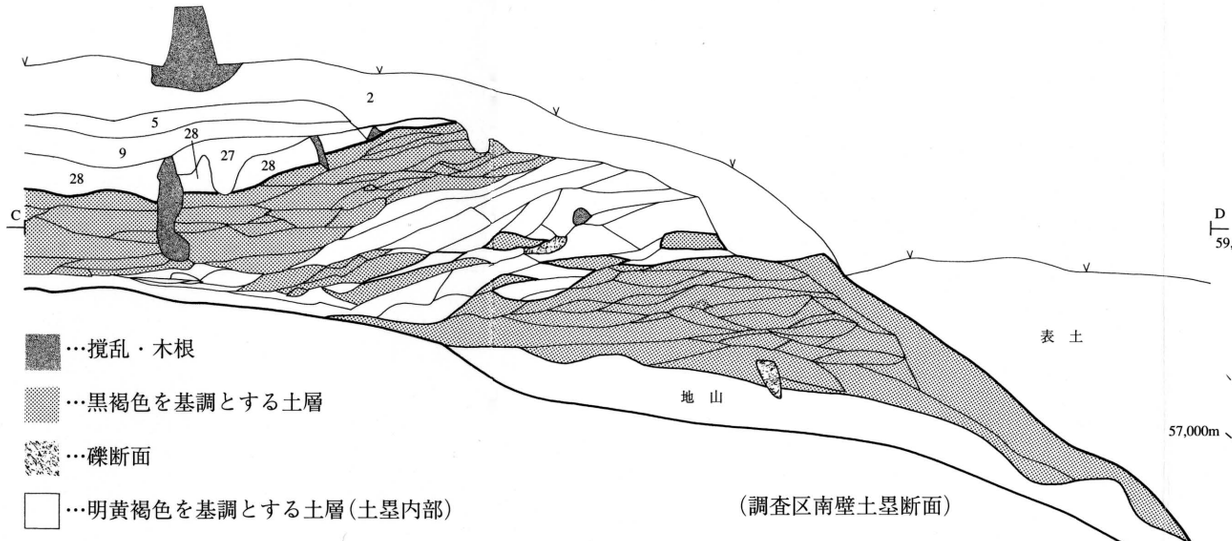
BトレンチからCトレンチを抜けDトレンチにかけての堀を仮称して呼びます。

AトレンチとBトレンチの中間あたりから緩やかに北東に方向を変えた堀は、Dトレンチを越えてさらに北東方向へ延びると考えられます。発掘調査の段階では、堀のつながりと考えられる黒色帯は北東方向へずっと延びていました。この北東方向への堀の断面等は、残念ながら調査範囲の関係で確認することができませんでしたが、平面での確認面を見る限り、この事実関係は間違いのないことであると思われます。

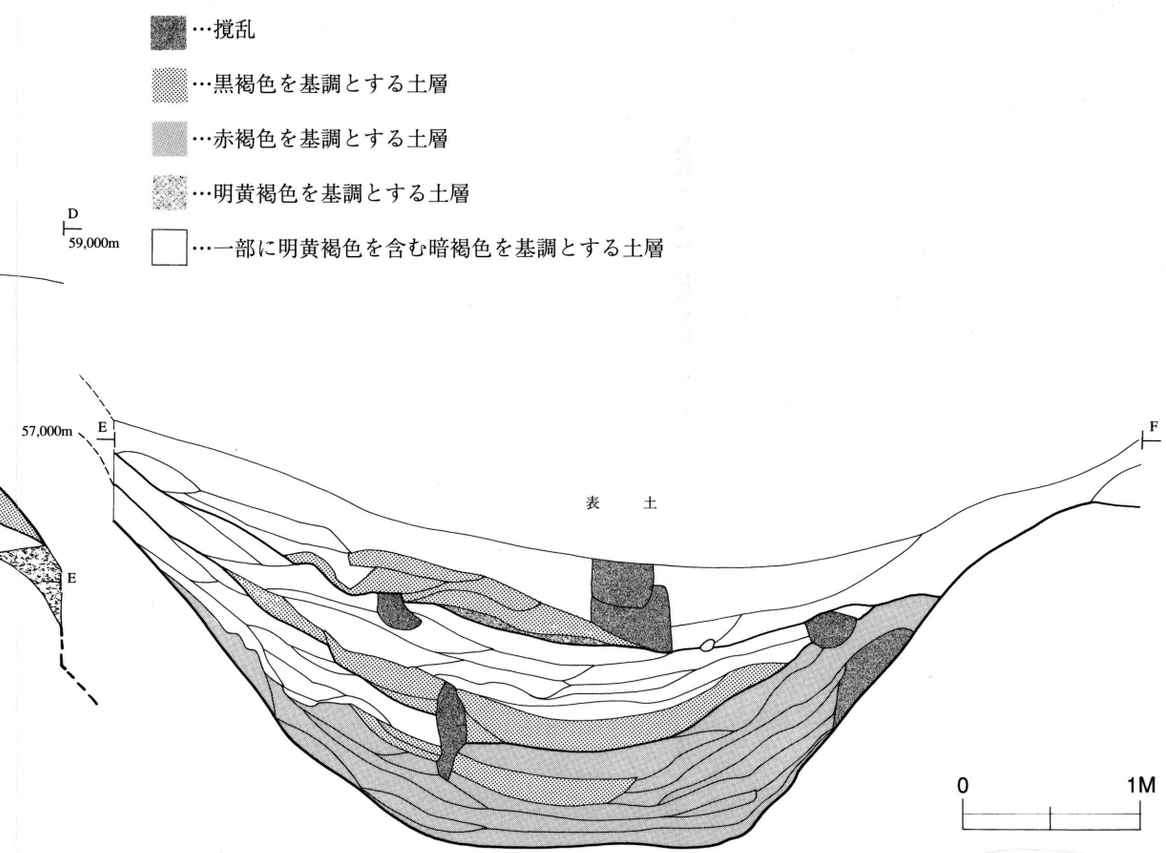
Bトレンチにおける土層断面の観察による空堀の断面形は逆台形を呈しており、Aトレンチ土層断面における空堀と同様に「箱堀」の可能性があります。しかし、逆台形という形状には類似点が認められますが、上面（開口部）と比較した底面の幅が狭く、壁の立ち上がりも直線的であり、急角度な傾斜を持っています。Aトレンチ断面とのこのような相違が、異なった地点における空堀の機能の違いに



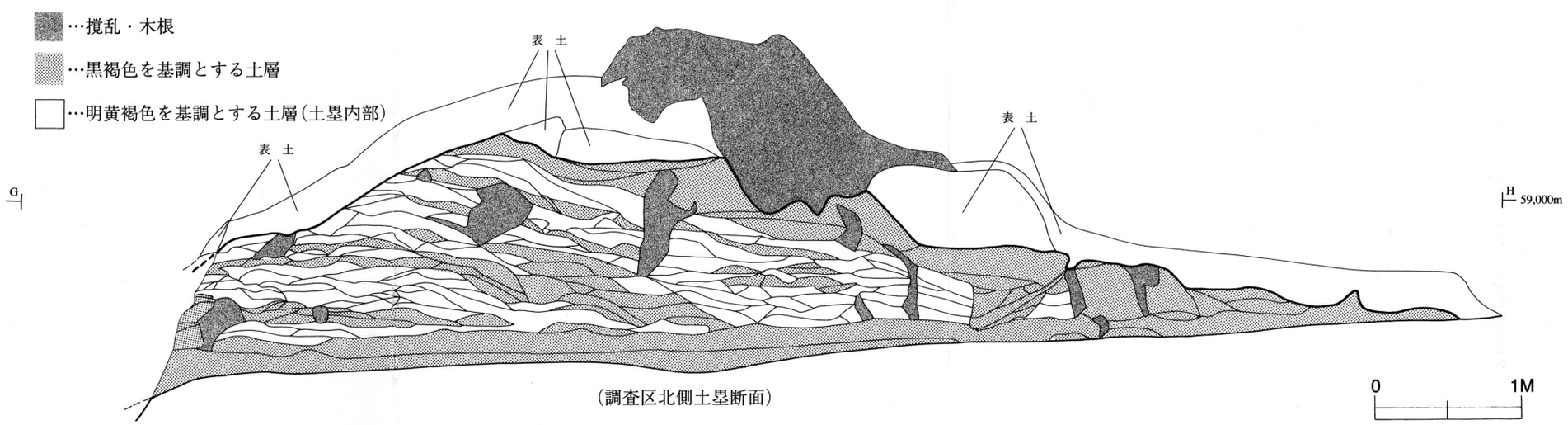
第6図　第一地点 調査区遺構全体図



(調査区南壁土塁断面)



(調査区南壁空堀断面)



(調査区北側土塁断面)

第7図　調査区南壁土塁・空堀断面図, 調査区東側土塁断面図

よるものなのか、あるいは地形などの制約や、他の施設との関係による構築方法の違いであるのかはっきりしませんが、Bトレンチから北東部の堀の断面は、どちらかというとこのような形状を踏襲して行く傾向にあります。

次に土層堆積状況は、黒褐色土・赤褐色土等を基調とする層に分けられ、地山崩壊土と考えられる赤褐色土が主体となっています。Bトレンチにおける堀の断面においては、土層等の違いによる時期差などは確認することができませんでした。

Cトレンチにおける空堀は、調査区域の範囲の制約により、南東側半分強を検出したに過ぎません。一方、断面形態は今までのものと異なり、南壁に〝段〟を有し、底面にも凹凸が見られるなど、複雑な様相を呈しています。また、底面の標高値も、Bトレンチにおけるものが五六m程度あったのに対して、五四・六mとなっています。南側土塁と北側土塁の構築面の標高値がおよそ五八mで変わらないため、今までの空堀底面の深さより約一m程深くなっていると考えられます。

北西側（Bトレンチ）空堀断面

土層は、黒褐色土・赤褐色土を基調とするもので、底面に黄褐色土が部分的に堆積しています。この部分の土層は、それより上層の土と異なっているため、人為的に埋め戻した層である可能性もあります。

先にも述べましたが、空堀の確認段階では、その方向はCトレンチからさらに北東方向に向かうことが予想されました。しかし、これとは別に、Dトレンチから大きく南東方向へ屈曲するもうひとつの堀の存在が明らかとなりました。これがFトレンチへと至る堀です。堀の確認面は、北東に向かうものは黒褐色土でしたが、このFトレンチへ向かう堀は、赤褐色土であり、土質の違いから確認されたものです。残念ながら、Dトレンチを掘削することによる断面での新旧関係の確認はできませんでしたが、Aトレンチからの空堀内の覆土の共通性から見て、北東方向へ向かう堀のほうが新しいものであると考えられます。また、これらの堀が、Bトレンチから延びる堀と分かれた地点がCトレンチ付近に存在すると考えられるため、Cトレンチにおける空堀断面が不整形を呈しているのは、この影響である可能性があります。

〔北東側空堀〕（第6・9図）

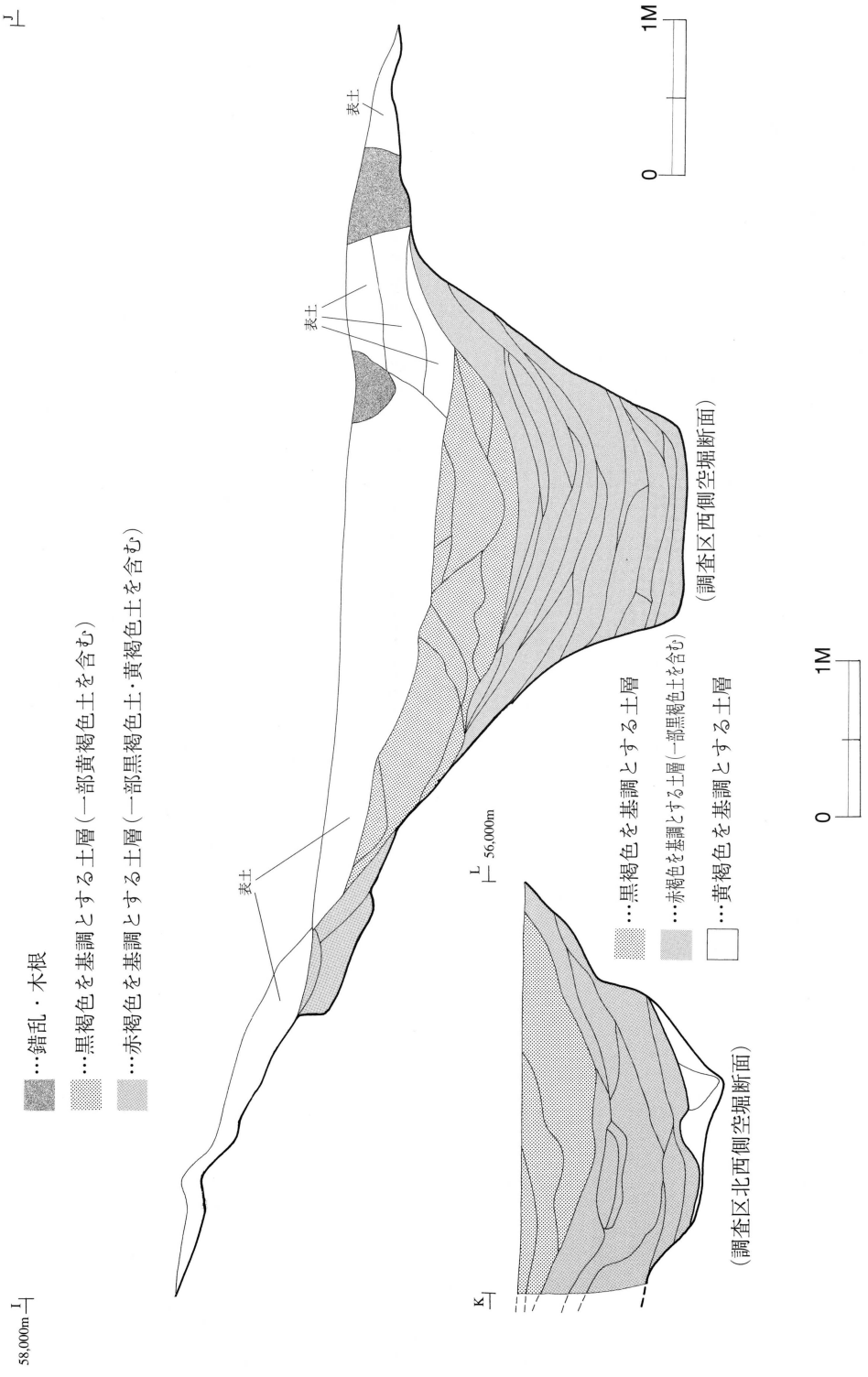
Dトレンチ付近で大きく南東に屈曲した堀はそのまま南東方向に延び、調査区東壁中央部付近でさらに東に屈曲し、調査区外へ及んでいきます。この間を北東側空堀と仮称しておきます。

北東側空堀の軸線から東側の部分については、調査範囲の制約から、掘削することができず、不明な部分が多くならざるを得ませんでした。しかし、堀幅など、空堀の平面的な規模等については、Fトレンチにおける断面などを見る限り、Bトレンチにおけるものとそれほど大きな差はないように思えます。Eトレンチにおける断面は、西壁から底面に至る部分を部分的に検出したのみですが、底面から壁面に至る屈曲や、壁の傾斜等についてはBトレンチにおけるものと変わりないと考えられ、箱堀の形態は踏襲されていると考えられます。次に土層堆積状況についてですが、大きく黒褐色を基調とする腐食土層・壁面崩壊土と考えられる赤褐色土を含む黒褐色土を基調とする層・そして黄褐色土を基調とする層に分けられます。特に中央部の黒褐色を基調とする土層帯から上層と下層は土質が異なっているため、この部分において時期差がある可能性が考えられます。

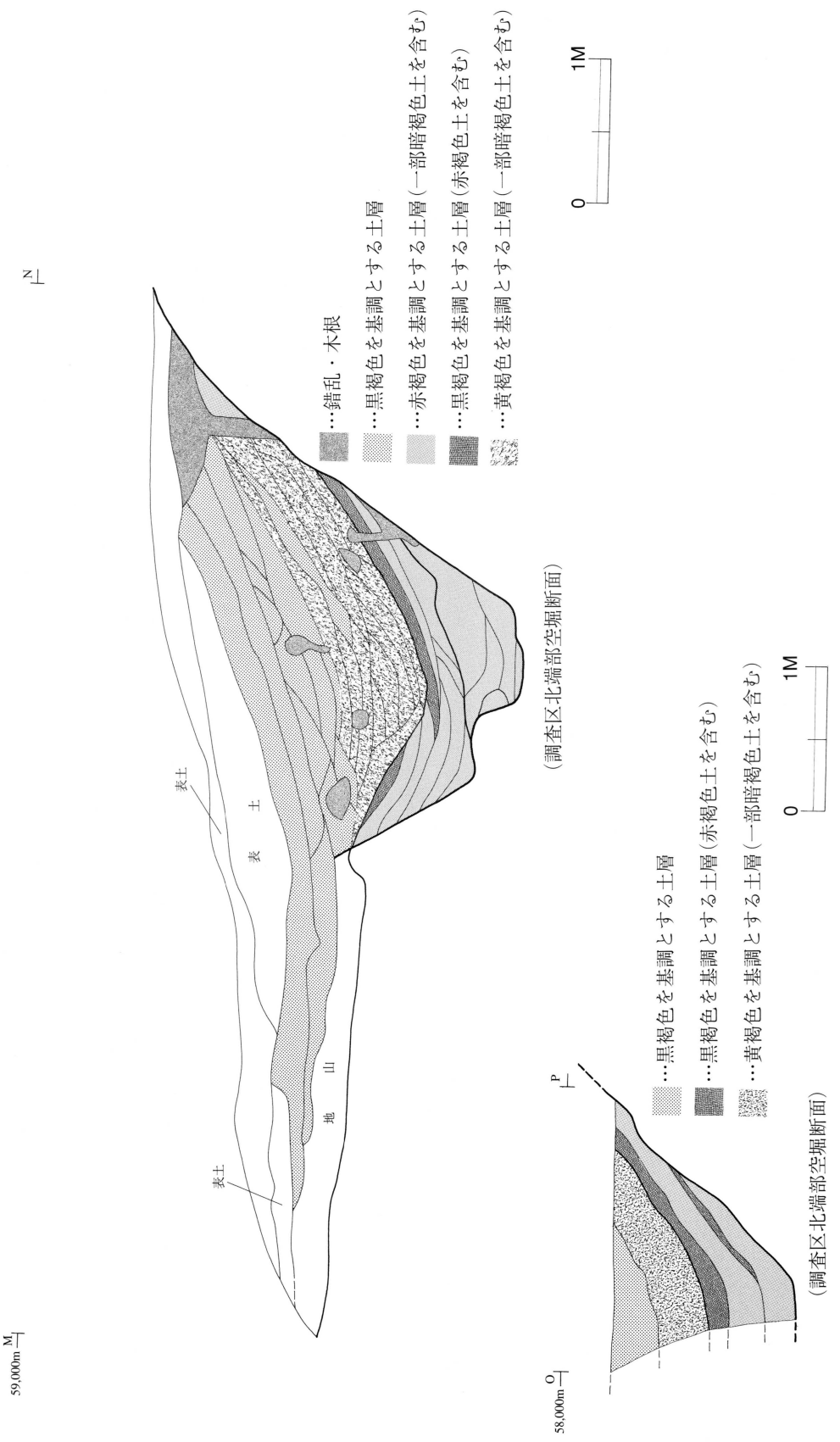
北東側（Fトレンチ）空堀断面

Fトレンチに至り、堀は九〇度に近い形で東に屈曲し、調査区外へ及んでいきます。この断面形態も基本的には逆台形〔箱堀〕の形態を呈していますが、底面付近の北側壁に段を有します。また壁は、南側が高く、北側の壁に二倍程度の長さを持って構築されています。土層堆積状況を見ると、上層から下層まで、南側から流れ込んだと考えられる土層が圧倒的に多いため、この壁の長さの関係は、空堀の使用当時から大きな変化がなかったと考えられます。

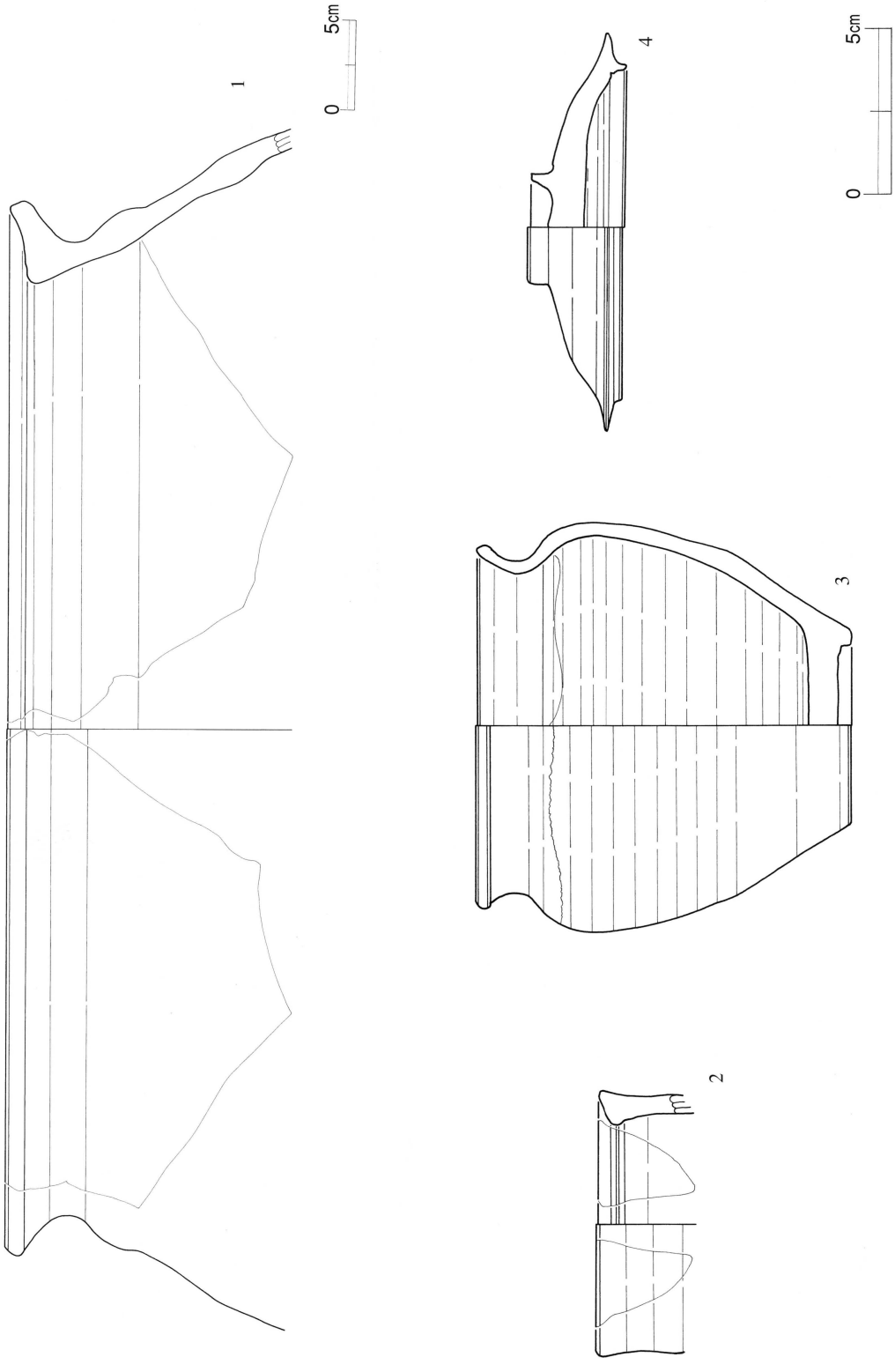
土層堆積状況は、黒褐色を基調とする腐食土層・赤褐色を基調とする崩壊土と考えられる土層、そしてその間に入っている黒褐色を基調とする土層帯に分けられます。一方、先に述べた、底部に〝段〟を有する部分の土層は、やはり赤褐色土を基調とするものですが、上層とは明らかに異なっているため、時間的な差がある可能性があります。この底面の幅は、上幅（開口部幅）に比べてかなり狭く、これまでの堀の断面とは異なっていると考えられます。堀の断面形態において、上幅に比べて底面の幅が非常に狭い、逆三角形を呈する形態は「薬研堀（やげんぼり）」と呼ばれ、特に壁の一方がカーブしている薬研堀は「片薬研（かたやげん）」



第8図　調査区西側，北西側空堀断面図



第9図　調査区北側，北端部空堀断面図



第10図　出土遺物実測図

と呼ばれています。そしてこの部分の堀の形態は、当初は薬研堀であり、一定の期間使用された後、底面が埋まるか埋め戻され、さらに新たに北側の壁面が拡幅されて「箱堀」の形態として使用された可能性が考えられます。さらに中間の黒褐色土帯の直上の土層堆積状況が、中途で途切れており、形状を見ても新たに掘削された堀である可能性があることを示しています。以上のことから、この部分の堀については、断面の観察から少なくとも三期に及ぶ使用期間があったことが推察されます。

(三) その他の遺構について(第6図)

調査区南側からは、遺構検出(ジョレンがけ)段階から複数の小穴(ピット)が検出されていました。これらのピットは直径一・五m~五〇cmの規模を有し、形状は楕円形、長方形など様々なものがあります。深さも一〇~二〇cm程度であり、ほとんどのピットの覆土に基本土層上層の者と考えられる黒褐色の腐植土が入っていたため、土塁や空堀と同時期のものではなく、それよりも後世のものであると考えられます。

一方、Bトレンチの空堀の底面付近や、Fトレンチ北側の地山が露出した面から検出されたピットの覆土については、空堀と同様に、地山崩壊土と考えられる黄褐色ないしは赤褐色土が入っており、土塁や空堀に伴う可能性が考えられます。また、これらのピットの覆土からは、焼土や炭化物を発見しており、火を受けた可能性があります。しかしこれらのピットも、あくまで部分的に検出したのみであり、ピット同士のつながりなども把握することができなかったため、それらの性格を、たとえば柱穴などという部分にまで持っていくことはできませんでした。

(四) 発見された遺物について(第10図)

出土した遺物は陶器類が主であり、今回の調査区からの遺物の出土は、日和山神社経塚からに集中しています。

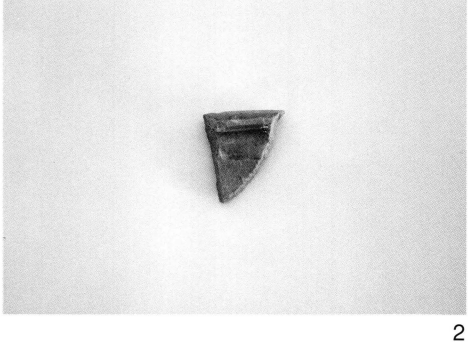
第10図1は近世常滑焼の甕の口縁部破片です。大型の甕の破片で、外面は赤褐色を呈し、分厚い口縁部を有しています。推定口径は五八cm程度を測ると考えられ、破片資料のため、詳細は判然としませんが、類似資料によれば、高さは七〇cm以上を測ると考えられ、時期的には十九世紀前半のものではないかと思われます。2は、筒型香炉の破片であると考えられますが、小片であるため、詳細は判然としません。外面および内面の口縁部付近に釉が認められ、口縁部内面に肥厚が認められます。時期的な部分についてはっきりしませんが、十六世紀以降のものであると考えられます。3は陶製の鉢で、4の蓋とおなじ場所から出土していますが、同一のものではありません。時期的には、器形から推察すると、十九世紀のものと考えられます。また、4の蓋も、時期的には3と同一に時期であると考えられます。

V　第二地点の調査

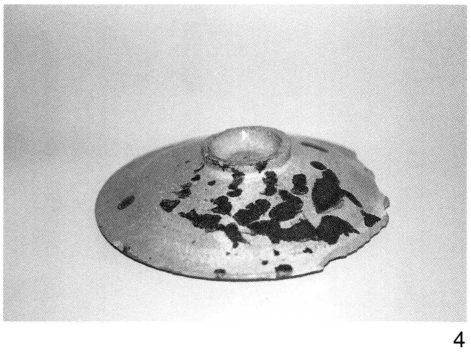
1　調査の方法と調査経過

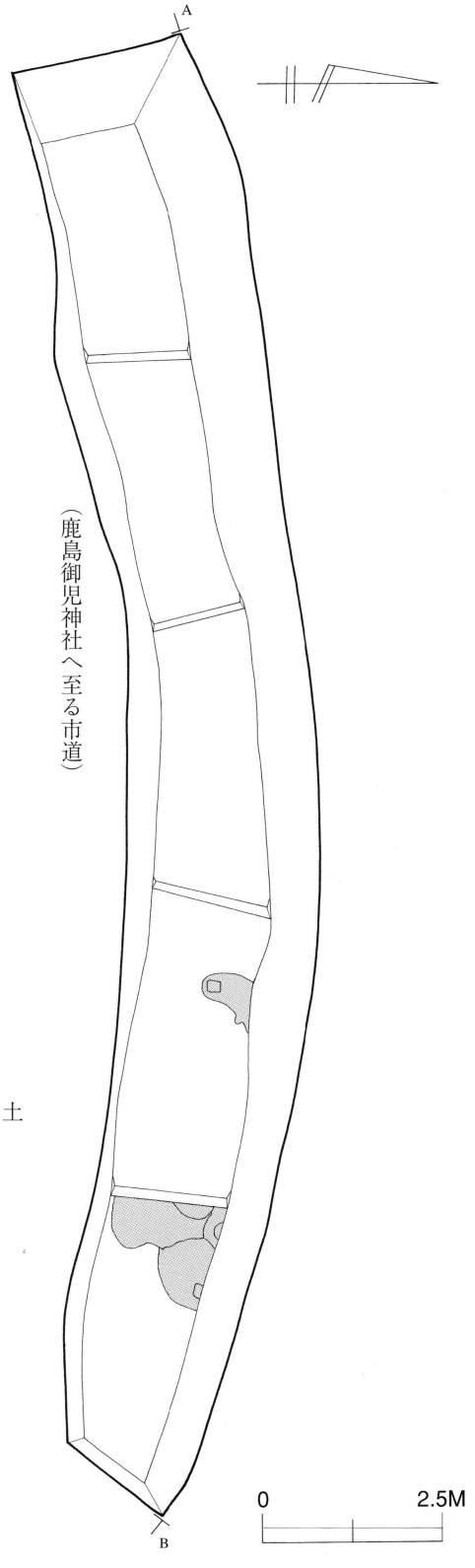
平成十年に石巻市都市計画課により、調査地点の北側の山の斜面を崩落防止のためにブロックで覆う計画が持ち上がり、工事の際に立ち会ったところ、土塁の断面を発見したため、記録による保存を目的とした調査を実施しました。第二地点の調査は、既に工事のために幅約二・五m、長さ二〇mほどのトレンチが地山面まで掘削されていたため、重機等による新たな掘削行為を実施することはせず、

1


2

3


4

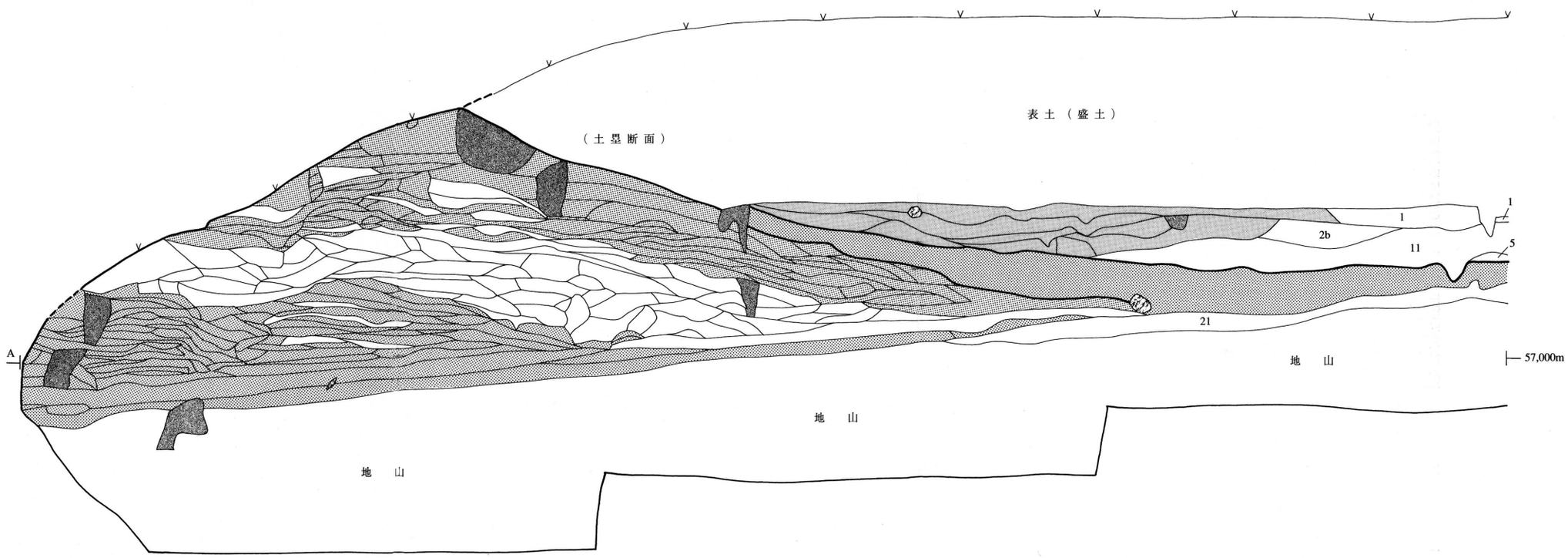


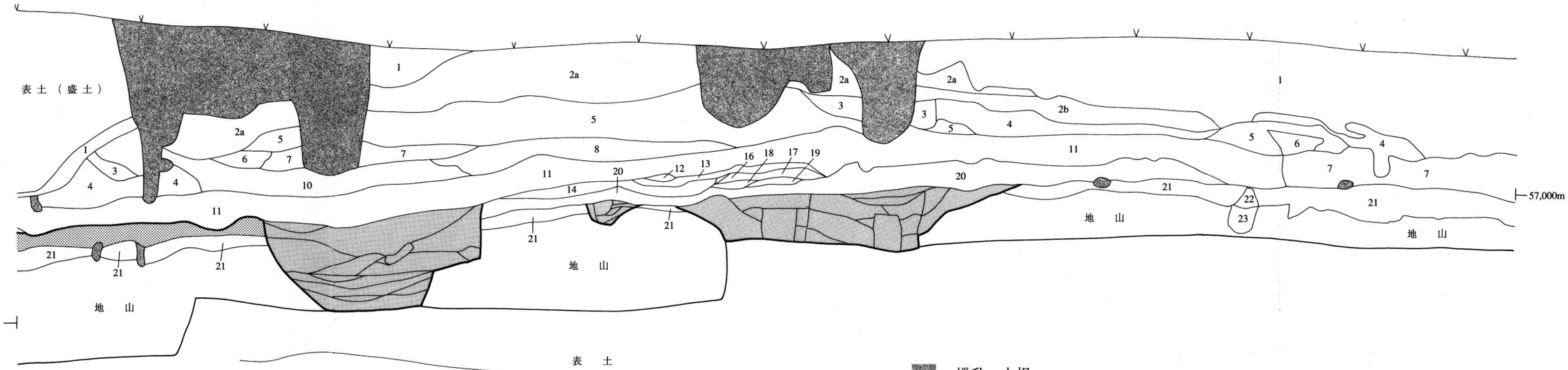
土 層 説 明

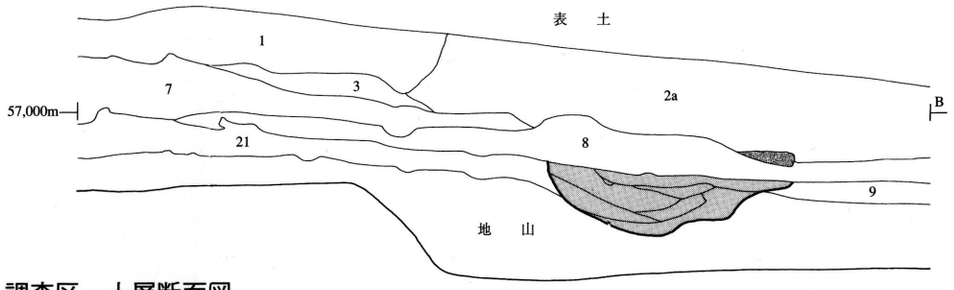
1	黄褐色土	8	黄褐色土	17	黄橙色土
2	a 黄褐色土	9	褐色土	18	黄橙色土
3	b 黄褐色土	10	黄褐色土	19	暗褐色土
3	黄褐色土	12	黄褐色土	20	褐色土
4	黄褐色土	13	黄褐色土	21	褐色土，黄橙色土
5	黄褐色土	14	黄褐色土	22	暗褐色土
6	黄褐色土	15	黄褐色土	23	褐色土
7	黄褐色土	16	黄橙色土		

(左ページ土層断面図 土層説明)

第11図　第二地点　調査区平面図







…撹乱・木根

…土塁内部で黒褐色を基調とする土層(一部黄褐色を含む)

…遺構と考えられる堀込

…礫断面

…土塁内部で黄褐色を基調とする土層(一部黒褐色土、暗褐色土を含む)

0　1M

第12図　第二地点　調査区　土層断面図

土塁等の断面を削って層の堆積状態を明らかにし、断面図を作成しました。また、このトレンチの底面からも遺構と考えられる部分を検出したため、この部分を面的に押さえ、その範囲等を記録するにとどめました。

2　発見された遺構（第11図）

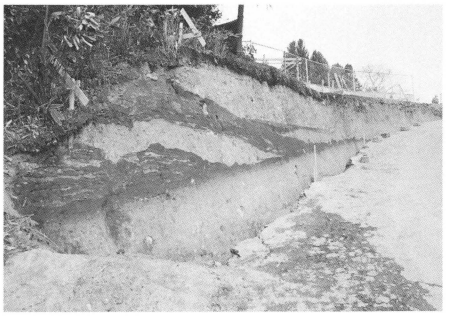
土塁のほか、断面にかかって人為的に掘り込まれたと考えられる遺構や、断面にかからずにトレンチ底面において遺構が検出されました。また、調査区に並行する道路（鹿島御児神社境内に至る市道）を挟んで反対側の斜面も工事の際に若干削ったところ、北側の続きと考えられる土塁の積土を発見しました。

（一）　土　塁（第11・12図）

検出した土塁は、第一地点から続く丘陵尾根付近の西側斜面に構築されており、西側端部が若干削平されています。トレンチの断面では空堀の断面は発見されなかったため、土塁と堀との関係は不明ですが、おそらく第一地点調査区の西側に南北に走る市道の下に存在しているのではないかと考えられます。

今回の調査区は、土塁をほぼ直角に分断しており、断面から考えられる土塁の幅は八m程度と考えられますが、その東側斜面から続く黒褐色土帯が、調査区中央部にまで及んでおり、この層も土塁から続く一連のものとして捉えた場合の長さは、一二・五mにもなります。土塁は地山面に直接構築されていると考えられ、頂部までの高さは約二mを測り、壁は西側から緩やかな弧を描いて立ち上がり、東側は比較的直線的に、非常に緩やかな傾斜をつけて構築されています。

土塁の積土は、地山面から見て黒褐色土→黄褐色土→黒褐色土の順に積まれ手織り、その上を黒褐色の腐植土が覆っており「版築土塁」の様相を呈しています。第一地点における土塁にはいわゆる「犬走」のような構造をもった部分が観察されましたが、今回の部分では発見することはできませんでした。また、これらの積土は、黄褐色土を挟んで上部と下部ともやや東側に傾斜しながらも、ほぼ水平に近い形で積まれています。また、黄褐色部分については他の部分との積み方の違いがあるにせよ、上部と下部の黒褐色層には、大きな積み方の相違が認められないため、この土塁については、再構築等の時期的な隔たりは確認することができないと考えられます。



（二）その他の遺構

まず、土塁の東壁（もしくは土塁直上の生活面）に接して、黒褐色土で構成される複数の黒褐色層を検出しました。これらの層は、地山ブロックを含み、しまりがある硬質の層であり、通路などに使用された遺構ではないかと考えられます。

一方、調査区の土層断面には複数の遺構と考えられる堀込が検出されており、特に調査区の東側から検出されたものについては、面的にも捉えることができました。しかし工事のために掘削したトレンチの底面が、地山面をかなり掘り込んでいるため、面的に捉えることができた部分についても、部分的に掘削してみた結果、非常に浅く、遺構の底面の一部でしかないと考えられます。とはいえ、断面と平面から見たこれらの遺構は、柱穴に近い形状を成しています。さらに、掘り込まれた面についても、土塁構築面と同一もしくはそれよりも古い面である可能性があります。

Ⅵ　まとめ

この章では、今回の調査成果の再確認と、過去に実施された調査成果などを踏まえた石巻城跡の姿を考えてみる事にしたいと思います。

1　土塁と空堀について

今までに、幾人もの研究者によって日和山の頂を中心とした館が存在していたことが推測されてきました。城郭の調査は、文献等によるものの他に「縄張り調査」といって全体的な地形を調査することによって館の構造や機能を判断する方法などがあります。今回の発掘調査は、そのようにして調査された城郭のごく一部分を、実際に発掘してみることによって明らかにしたに過ぎないのです。

第一地点における土塁と空堀は、調査区の南壁から北東方向に延びていました。空堀については、調査区の北東側において分岐し、一方はそのまま東に延びていくと考えられるもの。そしてもう一方は、南走した後、急角度で東に折れ曲がり、調査区外へ及んでいくものでした。一方、土塁は調査区北側において途切れ、その後、南走する空堀に伴ってやはり南走するのか、それともこの場所で途切れてしまうのかは明確にすることができませんでした。また報告の際に言及した、調査区東壁で確認した土塁の名残とも考えられる痕跡は、先の土塁につながるものであるのか、それとも別なものであるのか、今後明らかにしていくべき余地を残すことになりました。

また、土塁については、第一地点、第二地点とも「版築」の工法を用いているという共通性を見出すことができましたが、積手（つみて　一層一層の土の積方の違い）による時期差（再構築等の可能性）を見出すことはできませんでした。一方、空堀については部分的にせよ堆積土の土質により複数時期使用された可能性を示唆することができました。そして、これらの土質の差としては、空堀の底部付近と考えられる部分に、地山崩壊土と考えられる風化火山灰土（ローム）の再堆積土によるものであるという共通点があり、極めて硬質であったため、二回目以降の使用の際には突き固められた可能性も考えられます。また、これらの空堀

の断面形は、ほとんどのものが「箱堀」の形態を呈していましたが、調査区東端における堀の断面に、初期段階には「薬研堀」であり、その後箱堀へと再構築されたと考えられる痕跡が発見されました。

第二地点からは空堀は発見されませんでしたが土塁の位置関係や、積手の共通性から第一地点とつながる一連のものである可能性が高くなりました。また、この土塁は第二地点からさらに南走する可能性があります。そして、以上の遺構の構築方法は、明らかに中世の館の特徴を表すと考えられ、石巻城跡が従来から指摘されているように中世のものであるということを、発掘調査により城郭の部分的な構造を解明することによって明確にすることができたといえます。

2　石巻城跡の姿（第13図）

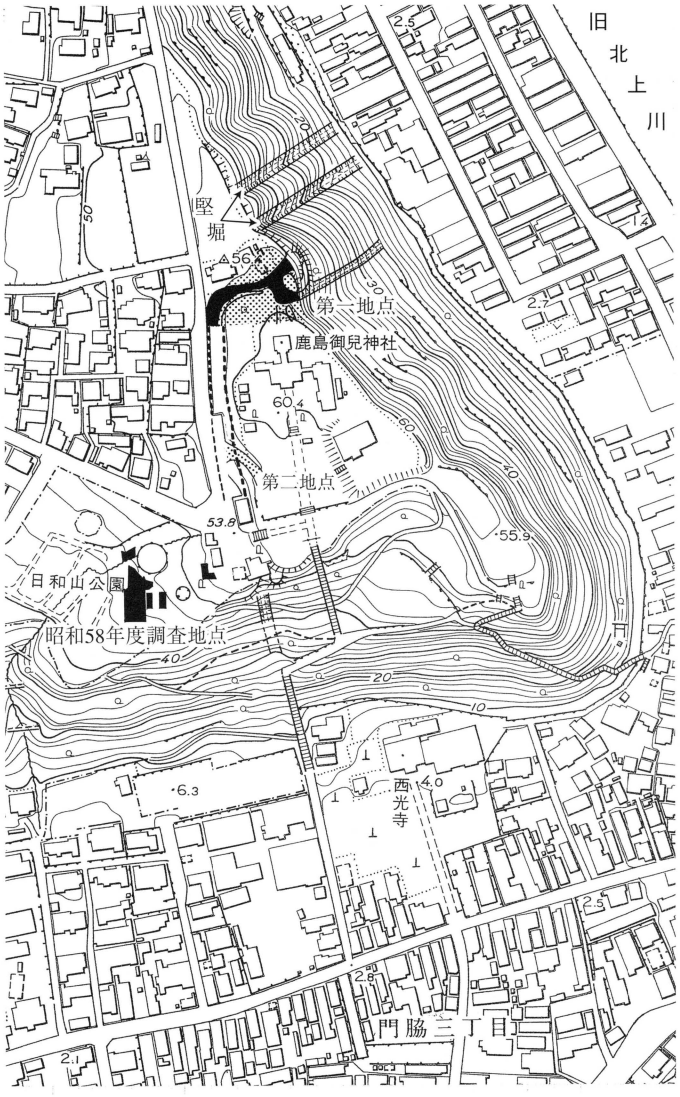
次に、過去の調査や縄張り調査などによる成果も加味した、現在わかっている石巻城跡の姿を説明してみることとします。

まず、地形的に見た場合に、第一地点の東側の縁辺部には複数の張り出しが見られ、発掘調査後の縄張り調査によって土塁状の構造と腰曲輪と考えられる施設が存在している可能性が指摘されました。また、この地点の北東側の崖面に斜面と平行した形で複数の竪堀が存在している可能性も指摘されています。一方、第一地点から第二地点へと至る土塁と空堀は、この後さらに南走し、日和山の南側の崖付近にまで及ぶ可能性があります。この土塁と空堀は、標高約五〇ｍから六〇ｍの部分に構築されており、館の中心となる施設はここよりもさらに上の平場に造られていた可能性が強いと判断されます。また、この下にも新たな遺構がある可能性は十分に考えられます。昭和五十八年に発掘調査が実施された地点はこれらの地点の南西側の平場に近い緩斜面であり、多くの柱跡を伴った掘建柱建物跡と考えられる遺構が発見されました。この部分の標高は四〇ｍから五〇ｍの範囲で、残念なことに遺物は発見されませんでしたが、地山直上の整地層と考えられる土層には、第一地点における空堀の下層の堆積土に見られるような火山灰土の崩壊土があり、注意を要すると考えられます。

また、このような整地層は日和山公園からすぐ西の、標高五〇ｍほどを測る地点からも確認されているため、今後は石巻城跡の範囲に関わるのではないかと考えられます。

3　葛西氏とのかかわりについて

今回の調査においては、葛西氏にかかわる決定的な証拠（遺物等）は発見することができませんでした。しかし、石巻城跡が中世の館である可能性が極めて濃厚になったことから、葛西氏に関わりを持つものである可能性も強まったといえます。石巻城が機能していた時代には、日和山の東側には現在あるような大河は流れていなかったとされています。しかし、稲井地域から流れ込んできた真野川が流入し、それと追波川がつながっていた可能性があり、史実が示すように、葛西氏が牡鹿（石巻）をはじめとする陸奥五郡二保の領地を与えられ、牡鹿郡から内陸部への河川物流の河口拠点として、石巻が重要な役割を果たしていたと考えられるのです。



第13図　石巻城跡の姿

石巻市文化財だより（第30号）

平成13年3月23日　印刷
平成13年3月30日　発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目1番1号
電話（0225）95-1111　内線 345

印刷：株式会社　七星社
石巻市南光町二丁目220-1
電話（0225）22-3101